

シルクロード・ネットワーク・白川郷フォーラム2024



シルクロードでつなぐ街と人 白川郷合掌造りは絹遺産の宝庫



白川郷・荻城跡展望台より 撮影：米山淳一

2025年3月8日（土）
フォーラム：基調講演・事例報告

2025年3月9日（日）
見学会：白川郷

主催：シルクロード・ネットワーク協議会
共催：公益社団法人 横浜歴史資産調査会・NPO 法人 街・建築・文化再生集団（RAC）
後援：白川村

ーシルクロード・ネットワークの白川郷フォーラムに臨んでー

当公益社団法人がシルクロード・ネットワーク協議会を設立して今年で11年目となりました。

幕末の安政5年の開港を契機に明治、大正、昭和初期まで、シルク貿易で繁栄した横浜で第1回目を開催したのを昨日のように思い出します。

以来、RACと力を合わせてネットワークを広げてまいりました。現在、20市町村や関係団体が加盟して、シルク関連遺産の保全やこれらを核とした歴史を生かしたまちづくりや観光振興などの情報交換の場として微力ではありますが、役割を担っております。

この度の白川村での開催は、昨年の横浜大会に三島敏樹様をお招きし、合掌造り民家が養蚕の工場であると知ったことがきっかけです。三島様が、ご尽力されている田島家を見てみたい、さらに、重伝建地区で世界文化遺産に登録された白川郷荻町集落を訪れてシルクの郷を実感したいとの要望が日増しに強くなり、晴れてこの度、フォーラムや見学会を実施する運びとなりました。

この間、白川村長成原様、教育長宮丸様、文化財担当の尾崎様、さらに三島敏樹様に格別のご高配を賜りました。この場をお借りしてお礼申し上げます。

2025年3月16日

シルクロード・ネットワーク協議会代表監事団体
公益社団法人 横浜歴史資産調査会々長 古賀 学



冬の合掌造り集落全景

写真提供 岐阜県白川村役場

シルクロード、出発点の様ざま ーシルクロード・ネットワーク 白川郷の開催によせてー

シルクロード・ネットワークの第8回フォーラムが、本年、白川郷で開催されますこと、ご尽力をいただきました関係者のみなさまに、感謝申し上げます。また各地からご参集されているみなさまにも感謝いたします。

シルクロード・ネットワークは第6回が神戸、7回が横浜と、絹の道の国内での終着点で開催されました。この二都市はまた、絹製品をとおして日本を世界へと繋ぐ接点としての役割を担い、別の意味で出発点でもあったといえます。一方、今年度のフォーラムが開かれる白川郷は、その絹産業を支えた道の出発点の最も良く知られている地域のひとつであり、それら出発点があつてはじめて、日本の絹産業は成り立ち、近代化が実現したわけです。シルクロードの道筋には、各地で産業、気候、文化などから多様な建築がみられますが、終着点の地では、世界との関係からと思いますが、海外の影響が建築に色濃く映しだされていたように感じました。他方、出発点ではいまあげた要因が固有の建築造形を生み出したといえ、白川郷の合掌造りはその典型といえます。さらに合掌造りの造形は地域を特徴づけるだけでなく、日本の絹と同じく、世界的にも認識されているものとなっています。その建築的特色、また保存・活用の現況などの講演、絹文化に関わる各地の方がたの活動報告、さらに建物と景観の見学など、今回のフォーラムの充実した内容に期待をよせております。

ところで、群馬も絹の道の出発地のひとつですが、その関係で建築的に興味深い例があります。私が注目しているのは、屋根が切り落とし型や切り上げ型（いわゆる赤城型とか榛名型）の農家建築よりも、むしろ切り妻、総二階の農家建築（私は勝手に蚕室型建物と呼んでいます）です。多くの場合、一階より二階以上が迫りだし、三階の設けられた場合もあるだけでなく、外からは二階にみえても、小屋のなかは三層、四層のこともある建物です。養蚕民家という名称が一般的なようですが、商売を営む町屋でも養蚕をやっていた例もあり、たんに農家とくれない建物もあったのではないかと考えております。知名度では合掌造りと較べものにはなりません、床面積を広くして、養蚕により有効な空間を求めた点では、合掌造りと共通する意図があつたように思われます。

今回の大会がシルクロード・ネットワークの新たな歩みを生み出すことになるよう、期待しております。最後になりますが、白川村をはじめとしまして、ご後援、ご共催をいただきました関係各位に、つつしんで感謝申し上げます。

NPO 法人 街・建築・文化再生集団（略称 RAC）

理事長 星 和彦



国重文塩原蚕種本社屋（前橋市）撮影：清水襄



旧中山道倉賀野宿の街道に面した養蚕民家
（高崎市）現存せず

●レポート目次●

・ 白川郷フォーラム 2024 スケジュール	5
・ 見学会コース案内図	6
・ 見学会資料	7
・ 講師プロフィール	8
・ 歴史的町並みと観光振興：	
古賀 学（松蔭大学観光メディア文化学部長／公益社団法人横浜歴史資産調査会会長）	9
・ 人々が紡いできた合掌造り：米山 淳一（（公社）横浜歴史資産調査会）	11
・ 結：尾崎 達也（白川村教育委員会）	12
・ 田島家移築のあゆみ：三島 敏樹（旧田島家養蚕展示館館長）	14
・ 横浜輸出スカーフ展示とアーカイブ資料の活用：高橋 典子（シルク博物館）	15
・ 山形県新庄市 旧農林省蚕糸試験場新庄支場（新庄市エコロジーガーデン「原蚕の杜」）：	
加藤 明（新庄市商工観光課課長補佐）	16
・ 飛騨の糸引き工女～竹林きよ子さん（98 歳）に聞く：	
藤井美登利（さいたま絹文化研究会 NP0 川越きもの散歩）	19
・ 蚕糸業概要 蚕糸業：栽桑・蚕種製造・養蚕・製糸・織物の五業の総称：	
田中 和夫（東京都立田無工科高等学校）	21
・ 下仁田地方の養蚕製糸の特徴：大河原順次郎（元下仁田町教育委員会教育課長）	23
・ 江戸時代の畑と周り桑：大塚 昌彦（日本考古学協会会員）	26
・ 前橋市の養蚕及び就労継続支援 B 型事業所カラフルの取り組みについて：	
村上雅紀（上州文化ラボ）	29
・ 養蚕民家は多層民家：中村武（NP0 法人 街・建築・文化再生集団）	32
・ シルクロード・ネットワーク・横浜フォーラム 2023 記録：	34
・ シルクロード・ネットワークの活性化にむけて：米山 淳一	37
・ シルクロード・ネットワークの仲間達 Since2015	38
・ MEMO	39

白川郷フォーラム2024 スケジュール



1. 日程：2025年3月8日（土）・9日（日）

フォーラム：8日（土）受付 12:40～13:00 フォーラム 13:00～16:30

会場 合掌造り民家園信称寺本堂

〒501-5627 岐阜県大野郡白川村荻町 2499 tel 05769-6-1231

見学会：9日（日）09:20 荻町城址展望台集合（徒歩、シャトルバス利用）

2. スケジュール

3月 8日（土）フォーラム会場：合掌造り民家園信称寺本堂

12:40～13:00 受付・開場

13:00～13:15 フォーラム開会

開会 米山 淳一（公益社団法人横浜歴史資産調査会常務理事・RAC 理事）

星 和彦（NPO 法人 街・建築・文化再生集団理事長）

来賓ご挨拶 成原 茂白川村長

13:15～13:55 基調講演 『』

古賀 学（公益社団法人横浜歴史資産調査会長・松蔭大学教授）

14:00～14:40 開催地報告 『白川郷合掌造保存・重伝建・世界遺産への道』

尾崎達也氏（白川村教育委員会）

14:30～16:30 各地からの報告（質疑応答・意見交換）

コーディネーター：米山 淳一

報告者：山形県鶴岡市、新庄市、福島県福島市、長野県千曲市、群馬県前橋市、
南牧村、埼玉県川越市、東京都八王子市、日野市、神奈川県横浜市、
富山県南砺市、兵庫県神戸市他（予定）

16:30～17:00 閉会・総括 古賀 学

17:00～19:00 情報交換会：白川郷の湯（宿泊所）

〒501-5627 岐阜県大野郡白川村荻町 337 tel 05769-6-0026

3月 9日（日）見学会

09:20 荻町城址展望台集合（徒歩、シャトルバス利用）

09:50～10:05 徒歩移動

10:10～10:40 国重文和田家

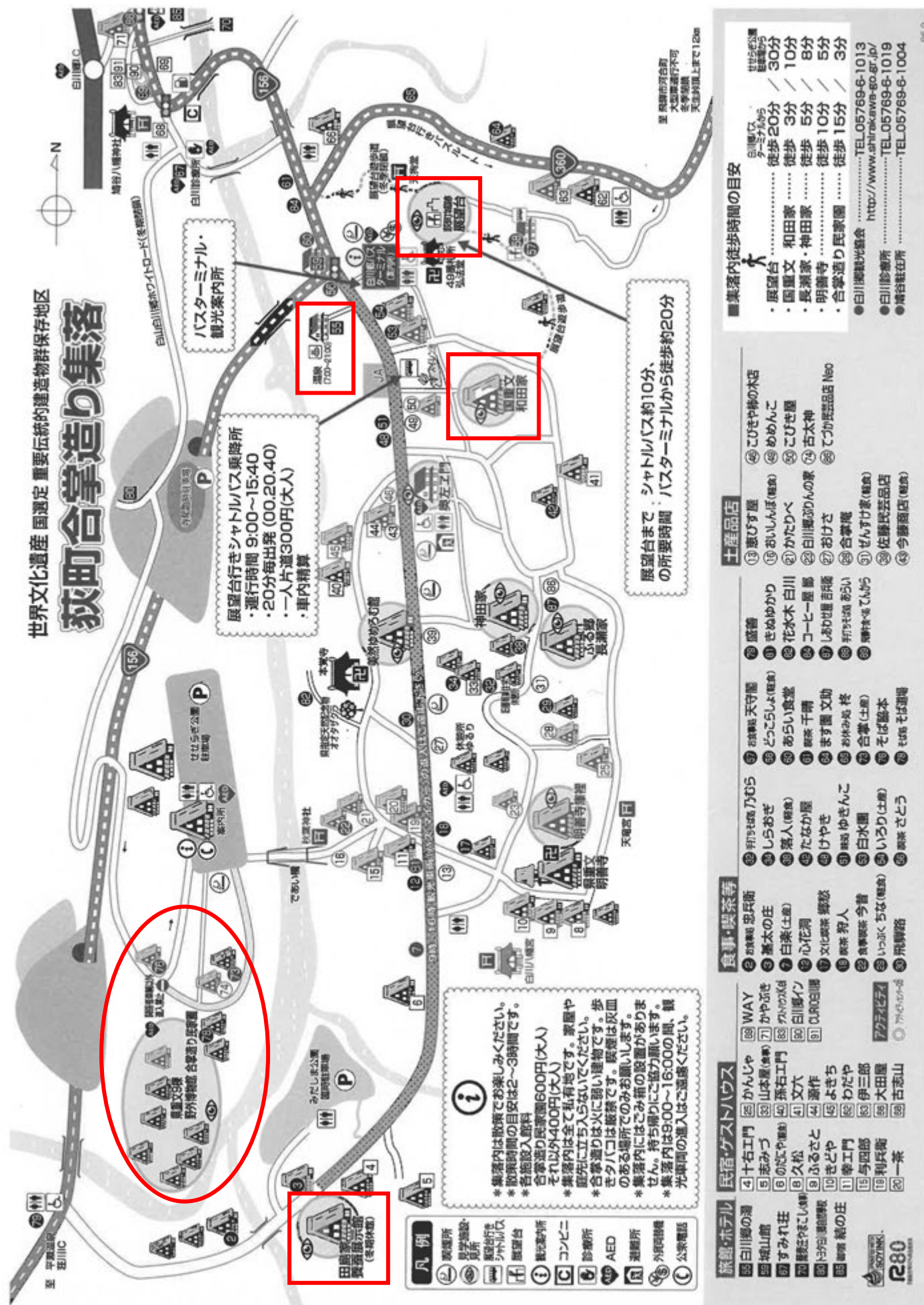
10:45～11:25 徒歩移動

11:30～12:00 田島家養蚕展示場

12:05～12:10 徒歩移動

12:15～13:00 昼食

13:20～14:00 野外博物館合掌造り民家園見学 解散・自由時間



① 荻町城址展望台（白川村境域委員会 HP より）

荻町城は世界遺産白川郷合掌集落を見下ろす台地先端に選地しています。この地は庄川と宮谷・牛首谷からの河川が合流する地点であり、標高 540m の比較的緩やかな台地で、山麓からの比高は約 60m を測ります。

戦国時代の白川は室町将軍の奉公衆である内島氏が支配しており、帰雲城を居城としていました。庄川沿いに南北に貫く白川街道上に帰雲城を防御するため南側には日崎城、新湊城、牧戸城が配され、北側には荻町城が配置されていました。荻町城からは西方の馬刈峠を、東方の牛首峠を監視することができます。（中略）

城の構造は背面防御として台地続きを切断する堀切と土塁が構えられ、その内側を城域としています。兵の駐屯地となる曲輪は単郭で極めて小規模な山城です。曲輪の西南隅部は一段高く削り残されており、櫓が配置されていた可能性があります。また、北、西、南の三方は切り立った絶壁で敵の進入を阻んでいます。この三方の崖面は自然地形をさらに人工的に削り込んだ切岸と呼ばれる防御施設です。（中略）

ところで戦国時代の山城は居住する施設ではなく、戦争の際に立て籠もる詰城でした。普段は山麓の集落に居館を構えて居住していました。荻町城の場合も麓からの比高も高いものではなく、恐らく山麓のいずれかに居館を構えていたのではないかと考えられます。荻町城の規模では立て籠もるような詰城ではなく、白川街道を監視する目的として築かれた境目の城として機能していたものと考えられます。（中略）

荻町城跡は小規模な山城ですが、戦国時代の山城としての構成要素としての曲輪、切岸、堀切、土塁が認められます。また、山城からの眺望も抜群で、構造、立地ともに戦国時代の山城の典型例として評価できます。

② 国指定重要文化財和田家住宅

和田家は、天正元年（1573）以来、代々弥右衛門を名乗っていたことが知られ、江戸時代には庄屋や牛首口の番所役人を務めるとともに、白川郷の重要な現金収入源であった焰硝の取引によって栄えた。

和田家住宅の主屋は、白川郷の合掌造民家として最大級の規模を持つ質の高い建築であり、式台付きの玄関を備えるなど格式の高い造りとする。附属建物や消雪用の石組溝、庭園石組など屋敷構を良好に保持していることも重要である。

③ 田島家養蚕展示場

旧田島家合掌造り民家にて、白川村内では行われなくなった養蚕の再興を試みています。村内唯一の養蚕をテーマとした展示館です。

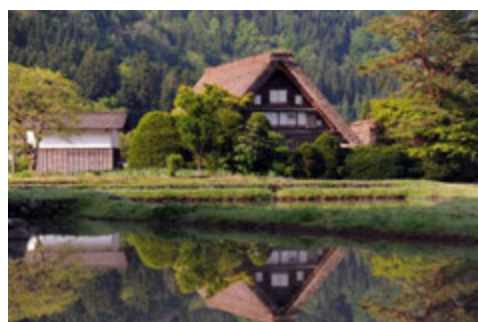
養蚕の他、白川村の養蚕の歴史や史料の展示、旧田島家移築を記録した貴重な民俗映像の放映等を行っています。学校教育、研修の場としても安心してご利用いただけます。

休憩スペースも整えておりますので、養蚕が盛んだった日々と今なお変わらない田園風景の中で、過去の秘境白川郷へ、思いを馳せていただければと存じます。

④ 野外博物館合掌造り民家園



荻町城址展望台より 撮影：米山淳一



国重文和田家住宅 白川村 HP より



田島家養蚕展示場 白川村 HP より

<https://www.shirakawago-minkaen.jp/>

講師プロフィール

□尾崎 達也（おざき たつや） 白川村教育委員会事務局文化財担当 課長補佐

1976年 白川村荻町生まれ

1999年 愛知大学経済学部卒業

同年 白川村役場入庁、商工観光課・総務課財政係、同消防防災係、観光振興課、議会事務局長を経て

2016年 白川郷荻町集落の自然環境を守る会事務局長就任

2024年 現職

□古賀 学（こが まなぶ） 公益社団法人横浜歴史資産調査会々長・松蔭大学観光メディア文化学部長・教授

1949年 福岡県生まれ

1972年 東京農業大学農学部造園学科卒

1972年 社団法人日本観光協会（現公益社団法人日本観光振興協会）入所、総合研究所所長を務める

2008年 松蔭大学経営文化学部教授

2009年 同観光文化学部（現観光メディア文化学部）教授。現在同学部長現在に至る

委員等：NPO 法人観光文化研究所理事長、一般社団法人国際キャリア教育協会理事、NPO 法人ふるさとオンラインのまち理事、NPO 法人交流・暮らしネット理事、高柳里山食文化研究所主宰
神奈川県観光審議会会長、神奈川県里地里山振興協議会会長、東京都「東京宝島事業」技術審査委員会委員等
総務省「地域力創造アドバイザー」、東京都「観光まちづくりアドバイザー」

□後藤 治（ごとう おさむ） 公益社団法人横浜歴史資産調査会常務理事・RAC 理事・工学院大学前理事長

1960年 東京生まれ

1988年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程中退、文化庁文化財保護部建造物課調査官を経て、1999年工学院大学建築都市デザイン学科助教授（建築史・建築保存修復学）、建築学部建築デザイン学科教授、2000年 RAC 理事に就任、2017～24年 工学院大学理事長

2015年 シルクロード・ネットワーク設立

委員等：NPO 法人 木の建築フォーラム理事／稲荷山地区伝統的建造物群保存対策調査委員会委員他

著作等：『建物の見方・しらべ方 江戸時代の寺院と神社』（共著）『建築学の基礎6 日本建築史』、『都市の記憶を失う前に』、『それでも「木密」に住み続けたい』等、多数

東日本大震災の復興に対しては、石巻市での『東北に美しい村を復興する Project』に携わる。

□米山 淳一（よねやま じゅんいち） 公益社団法人横浜歴史資産調査会常務理事・RAC 理事

1951年 神奈川県横須賀市生まれ

1974年 獨協大学外国語学部 英語学科卒業、財団法人日本ナショナルトラストに入所、事業局長を経て退所

2009年 公益社団法人横浜歴史資産調査会常務理事・事務局長に就任、2014年 RAC 理事就任

2015年 シルクロード・ネットワーク設立

委員等：獨協大学オープンカレッジ講師・日本鉄道保存協会顧問他

著作等：『地域資産 みんなと奮闘記』、『歴史鉄道 酔余の町並み』ほか

□星 和彦（ほし かずひこ） NPO 法人 街・建築・文化再生集団（RAC）理事長・前橋工科大学名誉教授

1951年 東京、駅舎の有名な国立生まれ

1975年 東京都立大学卒業、東京都立大学大学院工学研究科建築学専攻博士課程単位取得満期退学

1994年 前橋市立工業短期大学助教授（建築史・建築文化資源学）に奉職、前橋工科大学助教授、教授を経て、2015年前橋工科大学々長に就任、2022年退官、現在に至る

1999年 NPO 法人 街・建築・文化再生集団設立、理事長

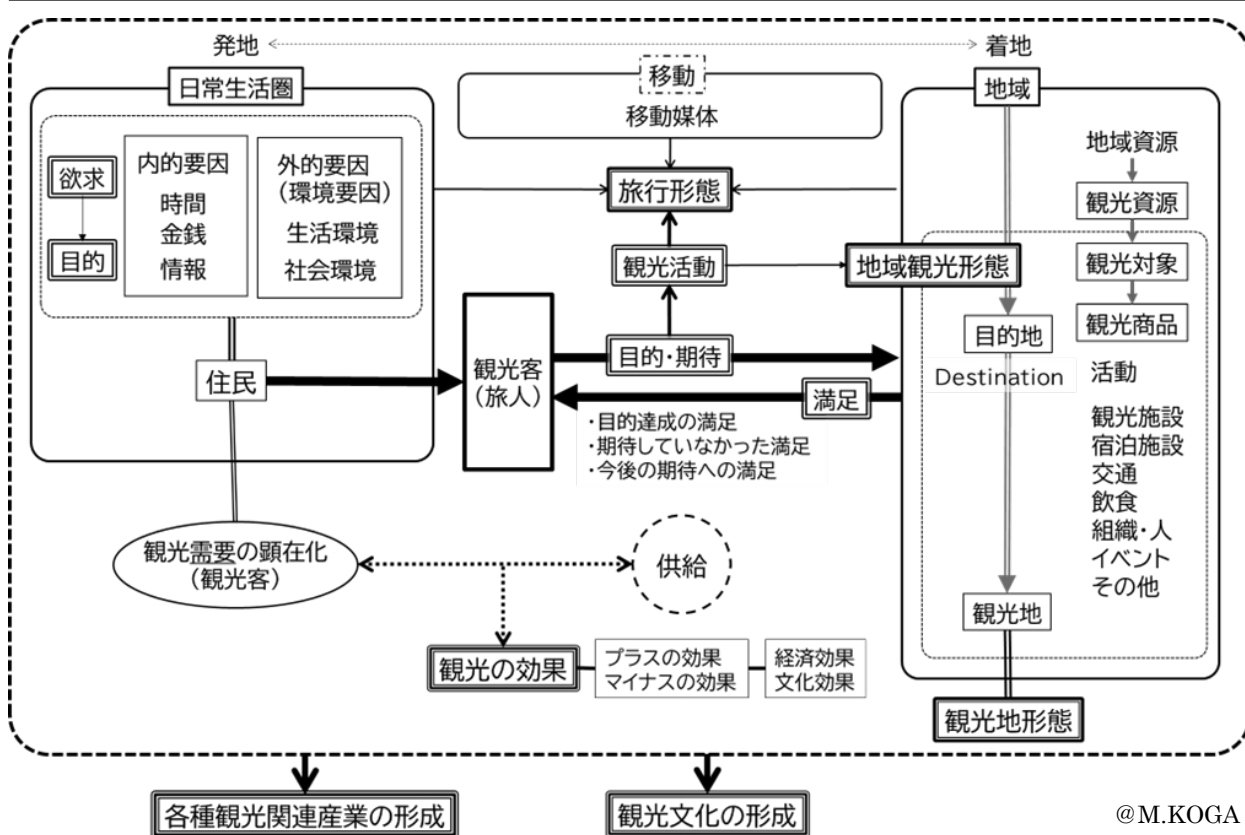
2015年 シルクロード・ネットワーク設立

委員等：日本建築学会関東支部建築歴史／意匠専門研究委員会委員、英国建築史、西洋建築史（英国建築史）専攻

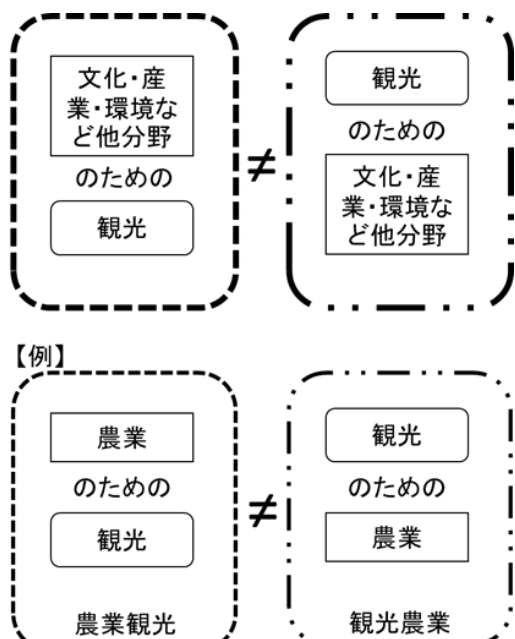
歴史的町並みと観光振興

古賀 学（松蔭大学観光メディア文化学部長／公益社団法人横浜歴史資産調査会会長）

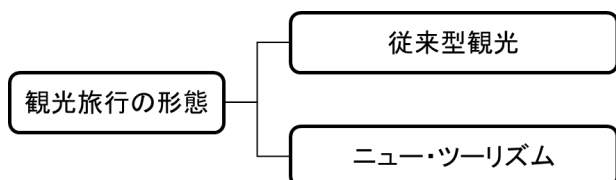
1. 目的地としての観光地の見直し（地域にふさわしい旅行商品）



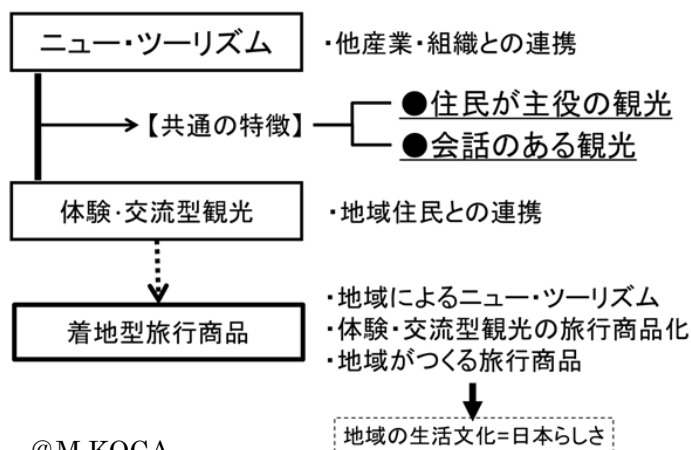
■従来型観光とニューツーリズムの考え方の差異：目的と手段の位置づけの変化



■従来型観光とニュー・ツーリズム



■ニューツーリズムと類似の観光タイプと特

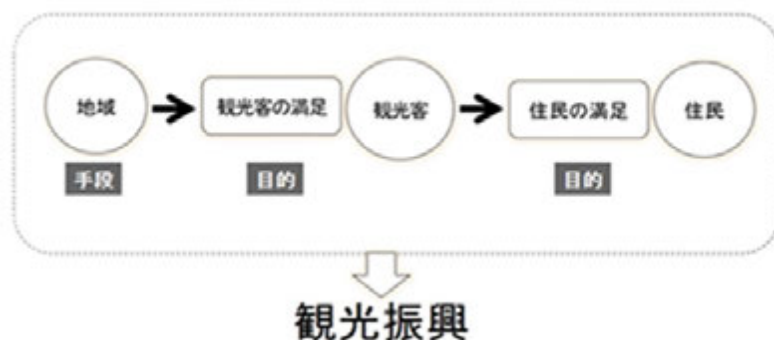


2. 観光振興の目的(誰のための観光振興)

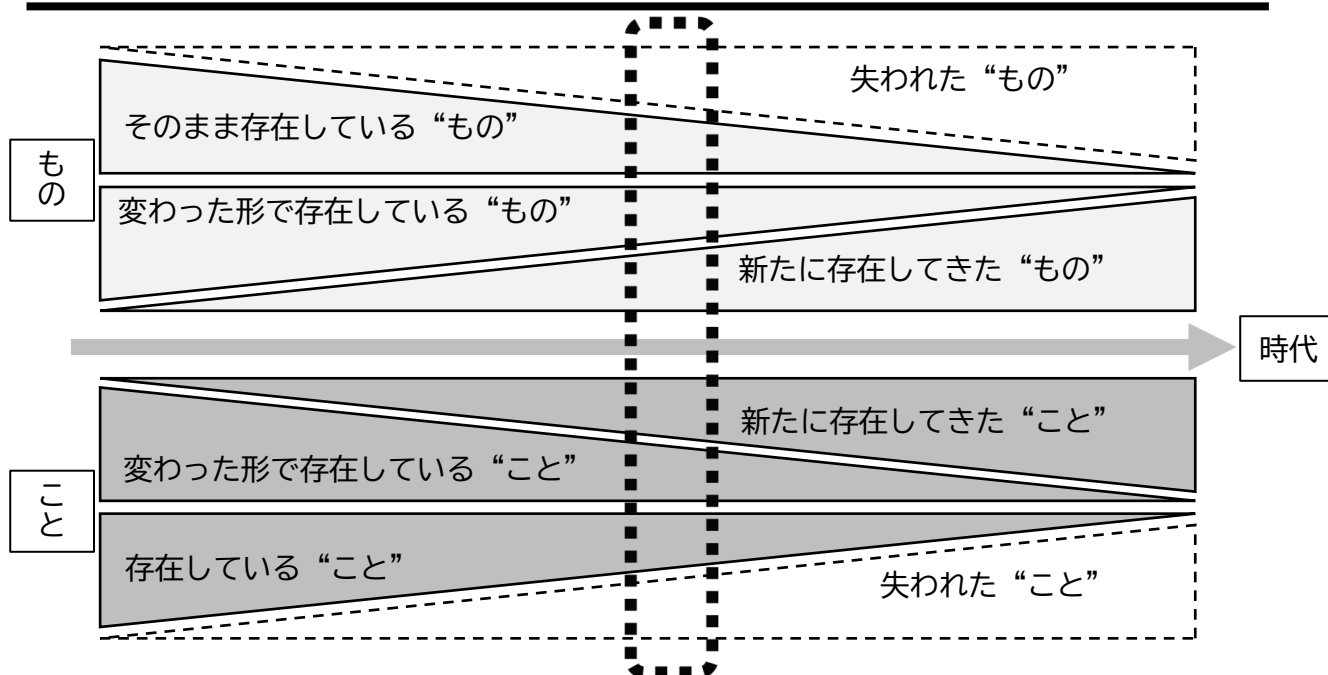
■地方自治法

第一編 総則 第一条 略

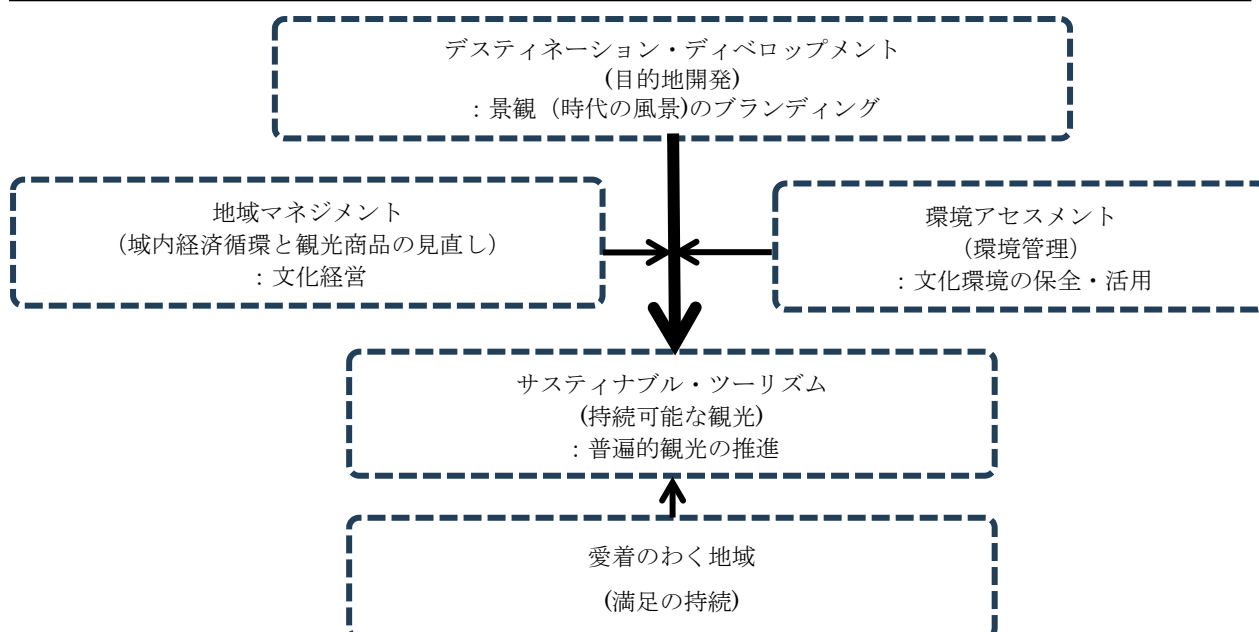
一条の二 地方公共団体は、住民の福祉の増進を図ることを基本として、地域における行政を自主的かつ総合的に実施する役割を広く担うものとする。



3. 時代の切り口(時代の景観を見直す)



4. 歴史観光の体系:観光地づくりから観光地域づくりへ



人々が紡いできた合掌造り

米山 淳一（公益社団法人横浜歴史資産調査会 常務理事）

合掌造り民家が養蚕農家、いや生糸の生産工場であることを知ったのは、シルクロード・ネットワーク協議会を設けてからである。

白川郷合掌造り民家の保存については、財団法人日本ナショナルトラスト在職時の昭和 62 年から市民の寄付金で 2 棟の合掌造り民家、松井家、寺口家の取得保存に関わってきた。

実はそれ以前の昭和 47、48 年にも日本ナショナルトラスト〔当時、財団法人観光資源保護財団〕では、保護対象に選定し、合掌造り民家の茅葺き屋根の葺き替え費用などを助成している。昭和 50 年の文化庁による重要伝統的建造物群保存地区制度が出来る以前のことである。

そのきっかけは、荻町の皆様が合掌造り民家を地域の宝として、市民運動的に残す活動を行っていたからである。ちょうど木曽街道の妻籠宿の保存運動と時期が重なっている。いずれも主役は市民。失われて行く地域遺産ともいえる地域固有の歴史的建造物を、自分たちの手で救いたいと言う草の根運動が発生していた。それは、地域に連綿と受け継がれてきた生活文化の継承でも、あった。

白川郷荻町では、荻町の自然環境を守る会が発足し、木曽妻籠宿から習っスローガン、伝統的建造物を「売らない、貸さない、壊さない」を合言葉に、地域遺産である合掌造り民家を地域の皆さまが一丸となって将来にわたり、残すことを誓ったのである。

その結果、重要伝統的建造物群保存地区に選定され、さらに世界文化遺産に登録。不動の位置を得たのである。

その陰には、地域を愛する人々の存在や戦略があったことを忘れてはならない。

例えば、荻町合掌集落で合掌造り民家の屋根葺きを行う場合は、「結」と言う制度で村人総出でお手伝いをする。これが合掌造り民家を守る原動力なのである。

また、合掌造り民家の修理や改装に関してもまずは、荻町合掌集落の住民からなる荻町の自然環境を守る会にはかり、賛否を得ることから始まる。要は、住民自ら住民をジャッジする、住民自治の精神が息づいているのである。

このような規範を意識しながら、地域の皆さまは、合掌造り民家を継承してきたのである。これは実に尊いことであり、まさにこれが白川郷のシビックプライドと言えるのではないだろうか。

景観は、結果であり、手がかりである。

ぜひ、荻町合掌集落を歩き、これを実感して頂ければ嬉しいかぎりである。

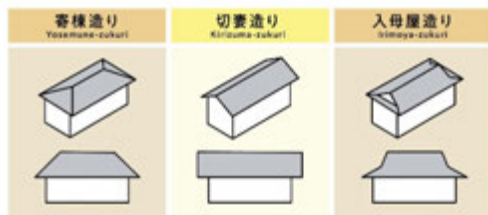


撮影：米山淳一



日本の茅葺き民家

茅葺きのかたち



日本における茅葺き民家の主たる屋根構造は寄棟造りや入母屋造りである



なぜ白川郷は切妻造りなのか？

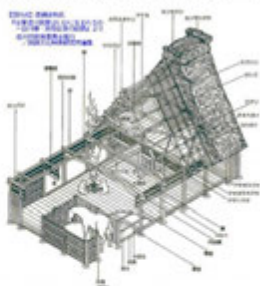
厳しい白川郷の生活を支えた産業

白川郷と五箇山地方では、平瀬池の少ない傾斜地のために耕作は少なく、わずかな畑地と焼酎で酒や味噌などが栽培され、食料の自給が頼りで行われていた。そのため早くから造りを利した産業が発達しており、白瀬利用の機織、白瀬利用の織機、桐を利用した和紙生産が主要な産業として発達した。特に養蚕は合掌造りの特異な形態を生み出す重要な要因となった産業で、室町から明治にかけて盛栄を極めた。



室町時代の産物では、ほとんどの村が養蚕を行っていた。明治3年の室町時代の産物記載の養蚕産量をまとめると、下白川郷（白川村）の養蚕の平均生産量は17.8袋と突出しており、室町時代の養蚕産量を誇っていた。

養蚕は合掌造りの特異な形態を生み出した



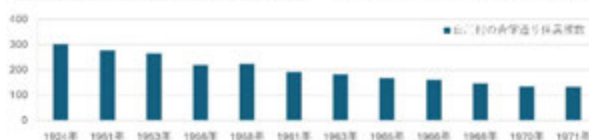
年次	養蚕家数	養蚕戸数	養蚕頭数	養蚕枚数	養蚕袋数
1924年	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
1951年	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
1953年	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
1955年	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
1957年	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
1959年	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
1961年	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
1963年	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
1965年	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
1967年	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
1969年	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000
1971年	1,000	1,000	1,000	1,000	1,000

合掌造り住居の激減

養蚕家の衰退



電源開発用のダム建設



A black and white photograph of a large group of people, likely a choir and staff, posing in front of a large, multi-story building. The group is arranged in several rows, with some people standing and others kneeling or sitting in the front. The building behind them has a prominent gabled roof and a central entrance. The overall tone is formal and organized.

1971年に水田信臣による山田縣史料編纂の自然保護を促す会が発足し、売らない、貸さない、こわさないの三原則を主とする自然尊重を明記。企業通り買収だけでなく、これらと一体となって歴史的景観を形成している。水田・畑・古道・森林などの環境も含めた集落全体を保存する運動が展開されている。



国の重要伝統的建造物群保存地区

1975年（昭和50年）の文化財保護法の改正によって伝統的建造物群保存地区の制度が廃止、翌1976年（昭和51年）の施行に伴い7地区が指定され、上田市区画がそのひとつとなる。

- 松王樹山北山角島 (武蔵野 6.9ha) ○ 栗原西本園町栗原 (岩手県 1246.4ha) ○ 栗原町栗原内山角島 (門前町 8.2ha)
○ 京町町栗原市北山角島 (岩手県 1.4ha) ○ 山口町栗原市山角島 (岩手県 56ha) ○ 山口町栗原市山角島 (武蔵野 4ha)
○ 松王樹山北山角島 (山角島 45.6ha) 今36年8月15日現在、43道府県106市町村128地区が認定されている。

ユネスコ世界遺産

序号	片名	所在地	拍摄年	备注
1	北平前门的公堂前街	北京	1993年	文化
2	哈尔滨	哈尔滨	1993年	文化
3	望天岛	海南岛	1993年	自然
4	三峡	湖北	1993年	自然
5	云南楚雄的文化	楚雄	1994年	文化
6	云南·昆明市的金家巷	昆明	1996年	文化
7	云南·昆明市的金家巷	昆明	1996年	文化

2004年7月現在、伊豆諸島は文化遺産候補地。自然遺産21箇所、生物遺産40箇所を合わせると22箇所となり、そのうち自然から文化遺産21箇所、自然遺産3箇所の合計が、世界遺産に登録されている。



白米消費削減の意義を説く会の声

白川郷・荻町集落の自然環境を守る住民憲章

- [illegible]

[illegible]

世界遺産登録による観光入込客数の推移

[illegible]

交通渋滞、駐車場問題への対策



を暮らしの質を高めるために、本質的な価値を見出す。

ご清聴ありがとうございました



田島家移築のあゆみ

三島 敏樹（旧田島家養蚕展示館館長）

旧田島家主屋は、現在地（世界遺産登録エリア）から北東方向へ数キロ程離れた戸ケ野集落に、明治10年頃に建てられたと伝わっている。創建当時は、間口6間半、奥行き3間半の合掌造りで、白川村の合掌造り民家としては、標準的な規模であった。

解体が予定されていた田島家は平成5年、白川村の事業で現在の位置に移築が計画され、同年9月に着工、翌平成6年2月に工事が完了した。工期は6ヶ月、延べ386人が関わった。

創建以来、田島家には部分的な改造が施されていたが、移築にあたり、創建当時の田島家主屋復元が目的とされた。その移築工事の過程は「白川郷の合掌民家・技術伝承の記録」として映像化され残されている。

田島家移築後、「技術伝承の館」として施設運用されていたが、数年で閉館され空き家になっていたところ、平成27年4月20日「田島家養蚕展示館」として屋内内部を改装し、運営されることとなり、現在に至っている。

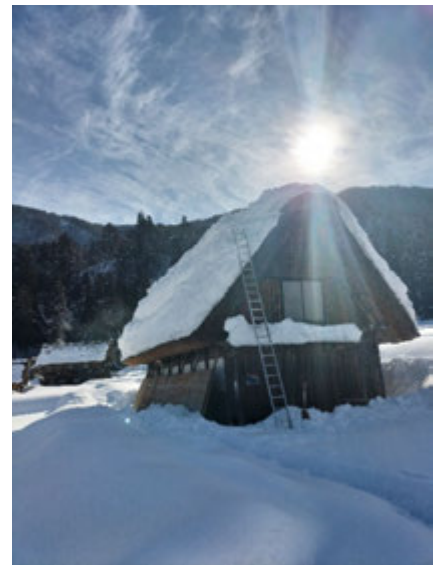


図1. 1月の旧田島家

白川村の養蚕

記録にあるには、江戸時代より養蚕業は白川村の人々の生活を支えた基盤産業であり、飛騨地方でも屈指の盛況を極めていた。その勢いは明治期以降にも引き継がれ、ことに生糸が外国貿易の花形輸出品となる二十年から三十年代にかけて、本村の養蚕業はピークに達するようになる。

明治初期の資料によると、当時の本村の繭の生産量は、年間4000～5000貫（15000～18950kg）を記録している。これらの繭のうち屑繭などを除いた大部分は自家で糸にひき、生糸として売り出していた。その量は、400～500貫（1500～1895kg）、しかも良質の生糸として市場で好評であった。

「本村の手びき絹糸は白川糸と云って有名であった。田島糸とも称し越中方面や京都に売り出された。西陣織のためには非常に喜ばれ御用糸にもなった」と旧『白川村史』に記載されている。

「例年相用來候糸堅横井附等之覚」という文久九年の記録によると、生糸の品質等級において、飛騨白川糸として最高位にランクされていたほどである。

養蚕は合掌造り民家の二階で行われていた。



図2. 秋の旧田島家



図3. 旧田島家の桁行の景観

横浜輸出スカーフ展示とアーカイブ資料の活用

高橋 典子（シルク博物館）

はじめに

シルク博物館は昭和 35（1959）年の開館以来、シルクに関するさまざまな事柄を学べて、優れた絹の染織作品などを鑑賞できる「シルクに特化した博物館」として活動を続けている。今回は、当館の近年の活動の一つ、「横浜輸出スカーフ」に関する取り組みについてご報告したい。

1. 横浜スカーフの歴史

1859（安政 6 年）年、横浜の開港とともに生糸の輸出が盛んとなり、明治 10 年頃からは絹織物の輸出も増大、そうした絹製品のひとつに手巾（てはば、ハンカチーフのこと）があった。日本の手巾製造の始まりについては諸説あるが、横浜の絹物商、椎野正兵衛が明治 6（1873）年に開催されたウィーン万博に派遣され、そこでの見聞をもとに手巾の製造と輸出を始めたことから、とされている。明治 20 年代に入ると、木版捺染によって美しい模様をプリントされた手巾が大量に輸出された。染織技術が木版から型紙、スクリーン捺染へと進歩し、より大判の「スカーフ」が製造されるようになり、昭和初期には手巾の製造をスカーフが上回るようになった。

第二次世界大戦は横浜のスカーフ製造を一時衰退させたが、戦後、さらなる隆盛を迎えた。横浜には、手巾の時代から続く高いスカーフ製造技術の蓄積と、製造工程を取りまとめる産地問屋の集中があり、横浜スカーフは世界にその名声を轟かせた。昭和 40（1965）年には、史上最高の 2,300 万ダースのスカーフ類が輸出された。最盛期には、輸出で世界シェアの 80%を占めていたという横浜スカーフであるが、外国ブランド品のライセンス契約が終了したことやファッションの流行の変化などにより、急激な減産となっている。

2. 横浜スカーフ・アーカイブについて

平成 6（1994）年、日本輸出スカーフ等製造工業組合から横浜市に約 11 万点に上るスカーフ資料が寄贈された。これは、昭和 27（1951）年に導入された意匠登録検査制度の資料のうち、昭和 32（1957）年から昭和 61（1986）年の間に意匠登録されたスカーフの実物サンプルと台帳で、組合の解散によって横浜市へ譲られた。平成 25 年、横浜市経済局により学識経験者や関連企業で構成する「横浜スカーフ研究会」（会長：関東学院大学 山崎稔恵教授、当館からも学芸員 2 名が参加）が発足、「横浜スカーフ・アーカイブ資料」（以下、アーカイブ資料）として約 33,000 点がデータベース化された。台帳には認定年月日、認定番号、申請者名のほかに柄名、繊維別、寸法、輸出商社名、加工工場名、仕向地などが記されており、実物サンプルの画像とあわせて商業目的や学術研究などに活用することができる。現在、アーカイブ資料は横浜市歴史博物館に収蔵されており、同館および横浜市中央図書館にてデータベースの閲覧が可能である。

3. アーカイブ資料の活用と関東学院大学・横浜市歴史博物館との連携

前述の「横浜スカーフ研究会」において会長を務めることになる山崎稔恵教授（当時）は、平成 23（2011）年度、横浜市経済局協業技術支援センターと関東学院大学総合研究推進機構との産官学連携協定のもと、横浜の輸出スカーフ意匠に関する調査研究を実施し、その成果発表の一つとして、翌年 12 月、シルク博物館において「大衆旅行時代と横浜輸出スカーフ」と題した展示を開催した。これ以後、シルク博物館と関東学院大学の連携事業として、毎年横浜輸出スカーフのミニ展示を開催してきた。（令和 2 年度は開催を見送り）

令和 3（2021）年、関東学院大学内に、アーカイブ資料を学術研究と産業利用の両面から後押ししていこうと「KGU（関東学院大学）横浜スカーフ研究プロジェクト」が結成され、シルク博物館でのスカーフ展示もその活動の一つとして位置付けられた。令和 4 年、横浜市経済局工業技術支援センターから横浜市歴史博物館にアーカイブ資料が移管され、資料のさらなる有効活用を図るため関東学院大学・横浜市歴史博物館・シルク博物館の三者が連携して活動していくこととなった。

この連携事業の柱の一つが、シルク博物館での「横浜輸出スカーフ展示」である。例年、テーマを設けて 12 月から 1 月中旬にかけて、常設展示の一部を用いて開催している。令和 4 年は「横浜スカーフにアフリカの風」、令和 5 年は「横浜スカーフ物語。その歴史を継いだ立役者たち」、そして今年度は「私の、推しスカ」と題して開催した。展示の企画・

監修は前述の KGU 横浜スカーフ研究プロジェクトによるもので、横浜の文化資産であるスカーフを多くの方に知っていただくために、毎回趣向を凝らした展示を企画している。横浜市歴史博物館とシルク博物館の学芸員も企画趣旨に沿って展示するスカーフの選定に関わり、会場レイアウトおよび展示作業はシルク博物館が担当している。

蛇足ながらひとつ付け加えると、展示しているスカーフはすべてがシルク製というわけではない。むしろ、アーカイブ資料においてシルク製のスカーフは少数派である。昭和 29 年にアメリカで施行された可燃物織物法により軽目羽二重の輸出が禁じられたこと、中近東やアフリカ向けに安価な大量生産品を手掛けるようになったこと、などから合成繊維のスカーフが増えたためである。

4. 横浜輸出スカーフ展示「私の、推しスカ」

令和 6 年度のスカーフ展は、11 月 30 日から令和 7 年 1 月 13 日まで開催され、2455 名の入館者があった。本展は、今の世の中はさまざまなジャンルで「推し活」が盛ん、ということから、横浜の文化資産である「横浜スカーフ」も推してみようと企画された。横浜から世界各地へ輸出されたスカーフは、上質のシルクを用いて丁寧に染め上げられた芸術作品といってよいものから、安価に大量生産された土産物まで種々雑多なものがある。そのデザインも、優美なもの、キッチュなもの、シュールなもの等、どれも個性豊かで魅力にあふれており、展示を観た方の感性にひっかかるものがあるに違いない。ということで、会場内にアンケートを設置して自分の推しスカを投票していただいた。アンケートは二次元 QR コードを用いてスマホからアクセスできるようにして、気軽に参加できるよう工夫した。

人気投票の結果、1 位になったスカーフが、画像⑤「太陽神」の名称で意匠登録されたスカーフで、アメリカの有名デザイナーであるヴェラ・ニューマンの作品である。

また、展示期間中、KGU 横浜スカーフ研究プロジェクトのメンバーである経営学部岩崎達也教授とゼミの学生 20 名が授業の一環として来館した。学生たちは横浜開港とシルクの歴史についてレクチャーを受けた後、スカーフ展示を鑑賞してそれぞれの「推しスカーフ」を選ぶという実践にうつった。会場には山崎稔恵名誉教授もいらして、スカーフの解説や学生たちの質問に答えるなどしていただいた。この授業を振り返って、学生たちからは、「推しスカを選ぶためにスカーフの図柄だけでなく、作品の背景にあるものについても考えながら鑑賞した」、「横浜の発展とシルクの関わりについて学び、横浜について新たな視点を持てた」などの感想がきかれたという。

おわりに

シルク博物館では、今後も関東学院大学と横浜市歴史博物館と連携し、横浜輸出スカーフ展示や輸出スカーフに関する調査活動などに取り組み、戦後の横浜の経済発展に寄与したスカーフ産業について、さまざまな側面から情報発信していければと考えている。アーカイブ資料についても、多方面に活用が広がっていくことを期待している。

(シルク博物館 高橋典子)

【参考文献等】

山崎稔恵「横浜の輸出スカーフ意匠に関する調査研究（一）」関東学院大学「人間環境研究所所報」第 10 号 2012 年
関東学院大学ホームページ <https://univ.kanto-gakuin.ac.jp/topics/20250120-0006.html>

【画像】

- ① 令和 3 年度展示「やばいじゃん！YOKOHAMA のスカーフ」
- ② 令和 6 年度展示「私の、推しスカ」
- ③ NO.2270 柄名「果物カゴ」 昭和 32 年認定 交織 仕向地アフリカ
- ④ NO. 12869 柄名「国連旗」 昭和 33 年認定 本絹 仕向地 USA
- ⑤ NO. 36593 柄名「太陽神」 昭和 35 年認定 6 羽二重 仕向地ニューヨーク



②



①



④



③



⑤

山形県新庄市 旧農林省蚕糸試験場新庄支場（新庄市エコロジーガーデン「原蚕の杜」）
加藤 明（新庄市商工観光課課長補佐）



■開園時間 午前9時～午後5時
■入園料 無料
■休園日 火曜日、年末年始
■施設情報 〒996-0091 新庄市十日町 6000-1
電話 0233-29-2122 Mail ecology-g@ic-net.or.jp

旧農林省蚕糸試験場新庄支場は、昭和9年に「蚕業試験場福島支場新庄出張所」として発足。施設の建設が進められて昭和11年より事業を開始しました。その後、昭和12年に「蚕糸試験場新庄支場」、昭和33年に「蚕糸試験場新庄原蚕種製造所」、昭和43年に「蚕糸試験場新庄原蚕種試験所」と改称を重ね蚕種の研究や桑の栽培等、戦中から戦後にかけて一貫して蚕

糸業の発展に寄与してきました。

この施設は、国の行政改革により昭和58年5月、「蚕糸試験場蚕育部原蚕種第一研究室及び農業生物資源研究所遺伝資源部保存法第二研究室」に改組され、幾度の組織改変の後、「東北農業試験場畑地利用部畑作物栽培生理研究室」を最後の名称として平成12年3月に閉所されました。その後、平成14年2月、新庄市に譲渡され、同年8月から「新庄市エコロジーガーデン」として蚕糸研究の歴史を紹介するとともに、自然環境を学び、交流の場を提供する施設として活用してきました。平成25年3月には、庁舎や蚕室、廊下等を含めた建造物10件が登録有形文化財として登録されました。



▲耐震改修後の旧第4蚕室



▲おやさいカフェ・アオムシ



▲多くの人で賑わうマルシェ

その後、「旧農林省蚕糸試験場新庄支場保存活用計画」を策定し、計画に基づき平成30年から令和3年までの4年間で、蚕室3棟の耐震改修工事を実施しました。平成30年にリニューアルオープンした旧第5蚕室では、産直施設が営業を再開し、令和2年には旧第4蚕室にカフェ・レストランやギャラリー、オフィスなどが開業、令和3年には旧第1蚕室をホールやギャラリーの貸館を行う「文化交流施設」としてリニューアルオープンしました。

開園から20周年を迎えた令和4年、エコロジーガーデンの更なる利活用に向けて国と一体型の道の駅整備の事業化が決定し、同年10月に国と基本協定を締結し、令和7年秋の開業に向けて施設整備を進めています。この道の駅整備事業では、新たに駐車場とトイレ休憩施設を整備し、既存の歴史的建造物群を地域連携施設として活用することとしており、登録文化財建造物を活用した全国で3例目となる珍しい特色のある道の駅として期待されています。（令和7年1月31日に『新庄エコロジーガーデン原蚕の杜』として登録）

■新庄の絹織物「新庄亀綾織」

新庄の伝統の絹織物「新庄亀綾織（かめあやおり）」。

新庄藩9代藩主戸沢正胤（まさつぐ）が文政13年（1830）に技術者を招き、藩の特産品として奨励したのが始まりです。

明治末期に生産が途絶え”幻の織物”と呼ばれていましたが、昭和60年に新庄亀綾織伝承協会が発足し「紗綾形」「八つ橋織」などの復元に成功。その後も織の復元と伝承活動を続け、現在では20種類以上の折り目模様があり、織り上げてから染色するため、しっとりとした風合いと光沢が特徴で気品のある色が美しい織物です。（現在3名の織手にて機織りを実施）



飛騨の糸引き工女～竹林きよ子さん（98 歳）に聞く

藤井美登利（さいたま絹文化研究会 NP0 川越きもの散歩）

飛騨の国は、古くから養蚕業が盛んで明治 16 年頃には現在の飛騨市（岐阜県旧吉城郡古川町）には 50 以上の製糸工場がありました。しかし、長野県岡谷地方の製糸業が諏訪式繰糸機の発明などで隆盛になると、飛騨地方の農村の少女たちは、岡谷や各地の大規模製糸業を支える労働力として出稼ぎに出るようになりました。

～岡谷に集まる工女の出身地は、いずれも生産力の低い山村地帯、小作地帯の零細な余剰労力で、例えば飛騨では吉城郡、大野郡等のヒエ飯主食地帯。甲州では富士山麓。信州では八ヶ岳山麓の麦飯トウモロコシ地帯、新潟では中頸城郡、刈羽郡、魚沼郡等で、ここは米どころでも、当時は強固な地主支配の農村で、米を作っていないながら米が食えない地帯といわれていた。こういうところが工女募集の対象である。『あゝ野麦峠』より

岐阜県飛騨市に住む知人のご母堂が、かつて製糸工女として働いていたと聞き、2018 年にお話を聞くことができたので紹介します。

■竹林きよ子さん（1924 年生まれ） 当時 98 歳 岐阜県飛騨市在住

私は飛騨古川町（現在の岐阜県飛騨市）の出身です。父は弍之町で畳屋をしており、3 人兄弟の末っ子として生まれました。6 歳づつ離れた兄が 2 人いました。母は私が小学校 4 年のときに心臓マヒで亡くなりました。尋常小学校をへて高等科 2 年を終えた昭和 14 年 4 月、14 歳で親戚の紹介で愛知県一宮市の片倉製糸に糸ひきに出ました。母親がわりの兄嫁が用意してくれたハイカラな着物を着て、高山線の蒸気機関車に乗りました。

◆一宮の片倉製糸へ

20 条式の繰糸機が 48 釜で 1 班。それが 9 班あり、その他揚げ返し担当などもいたから 500 人規模の工場でした。服装は洋服で自由だった。20 条式の機械だったので一日中、立ち仕事。私は手先が器用だったのでそんなに苦労はしませんでした。仕事に対しては絶対に人には負けないという強い気持ちで向かいました。朝 6 時に起きて 7 時から朝勤務、その後朝食。休憩なども入れて夕方 5 時までの 8 時間勤務でした。寝るときは 10 人部屋で布団を引いて。お盆はそれぞれの地域の盆踊りを競い合って披露などもしました。休日は 1 日と 15 日の月 2 回です。名古屋に遊びに行き、松坂屋で珈琲やアイスなどを食べました。給料は 1 年に 1 回の支給で、地域の担当者が 12 月 28 日ごろ古川の実家まで持ってきて、家長である兄に直接渡しました。渡されるまで自分の給料は知りませんでした。家では、現金収入である給料を本当に喜んでくれて、柗に入れて神棚に供えてありがたがってくれました。その家族の顔を見るために一生懸命働きました。小遣いは会社の事務の人に言ってそのつどもらいました。うどん 10 銭、映画も 10 銭、着物は 2 円ぐらいでした。

◆教婦（工女の指導監督者）への道

昭和 17 年、入社 3 年目 17 歳の時に、会社の推薦で片倉製糸大宮工場内にある研究所で教婦の研修を受けることになりました。全国に 60 ある片倉の工場から 62 人が入学。東北の人と鹿児島の人言葉が通じないこともありましたが。大宮工場は水洗便所で驚きましたね。研修の内容は管理者としての心得と方法、とくに人間関係作りについて学びました。その他教科の授業、音楽、数学、国語もありました。教婦といわれる先生が 10 人いて、6 カ月の研修です。その間もお給料をもらいました。当時の生糸はアメリカの女性用のストッキングのため、5 粒繭のデニールの細い生糸を作りました。お正月休みは浅草の国際劇場で水の江タキ子や月丘夢路の舞台を皆で観劇しました。3 月の卒業旅行は横浜です。生糸検査場を見学しました。別れるときは大宮の写真館で手札サイズの写真を撮影し、仲良しのお友達と交換しました。



図 1. きよさんと



図 2. 片倉製糸入所集合写真

◆教婦となり職場へ

大宮から戻り、8 か月は一宮の片倉製糸で教婦として働きました。勤務時間は、午前が朝 8 時前から 12 時まで。お昼 45 分。10 時と 14 時半には機械を止めて 10 分の休憩。5 時には繭の桶数を数えて一日の終わりに発表します。9 工場から連絡があがってきて報告があります。できる人で 45 杯、最低でも 30 杯分の糸を引かなくてはなりません。そして、糸がきれいかどうかの点数付けがあり、75 点からは劣等点となります。毎日この発表の時には緊張しますね。叱る教婦もいたけどわたしは叱らない、と決めて接しました。アメリカとの戦争がはじまると、今度は落下傘用の生糸づくりです。繭 25 粒のデニールになりました。

～製糸業者がいつも問題にしていることは 3 つに尽きる。①糸相場②原料繭確保③工女確保である。この 3 本柱のどれが狂っても製糸工場は成り立たない。輸出に依存する製糸業にあつては糸相場の変動にはなすすべがない。製糸業を別名「生死業」ともいうが糸相場の変動の損失を何でカバーするかと言ったらそれは養蚕農民に対する繭の買い叩きと、等級賃金制と称する巧妙な制度である。これは製糸女工全体に支払う賃金総額をあらかじめ固定し決定しておいて、その枠内で工女を相互に競争させることにより取り合いさせるものである。『あゝ野麦峠』より

■聞き書きをおえて

竹林さんは農村出身でもなく、岡谷で働いたわけではありませんが、『あゝ野麦峠』で山本茂美が記録した多くの少女たちのまさしくひとりだと思いました。98 歳の今も大切にされているアルバムには、製糸工場と一緒にいた 10 代の少女たちの写真が残されています。プリクラの撮影を楽しむ現代の少女と同じあどけなさです。いちばんの親友は、大陸の花嫁に志願して満州に渡り、連絡がつかないという哀しい話もお聞きました。

ご自宅の近くには岡谷の製糸会社が寄進した玉垣に囲まれた寺院や、工女たちが家族と岡谷出発の別れの食事をした立派な旅館が残ります。飛騨市はそれらを工女たちの顕彰とともに、観光資源とする展示館開設を検討しているそうです。

明治の近代化はどこにいきついたのか。不十分な工場法のもと酷使された工女だけではなく、工場経営者も最大の輸出先のアメリカと戦争になり販路喪失、戦後はナイロンの登場。軍艦だけが丸太り、そして敗戦。『絹と軍艦』はいつもセットで考えなくてはならないと強く感じます。

参考資料：飛騨の糸引き工女調査報告書（飛騨市教育委員会 2021 年）



図 3. アルバム

蚕糸業概要 蚕糸業：栽桑・蚕種製造・養蚕・製糸・織物の五業の総称

田中 和夫(東京都立田無工科高等学校)

1.近世から明治の蚕糸業

近世：三河、近江など、京都西陣における機業を中心として形成された中世絹業地域から、生産地が徐々に移行した時期。

奥州(福島)、上州(群馬)、信州(長野)といった、東山養蚕地帯の誕生につながった。

特に福島の信達地方においては、文化年間(1804~18)に養蚕、製糸、織物の3工程の分離がほぼ確立されていたのをはじめ、上州においても、宝暦(1751~64)前後に桐生機業の発展を軸として、桐生近郊の機業、中毛の製糸、北毛の養蚕というように工程の分化が進んだ。

主要蚕業地：桐生・足利・八王子・郡内・福島・秋田・川俣・仙台・米沢等
中部関東奥羽地方に成立した機業地の後背地として、まとまった生産地を形成

蚕の卵が産みつけられている台紙：種紙(たねがみ)

養蚕を行うには、種紙を蚕種商人から買い、産卵を孵化させて繭を作らせる。

1692(元禄5)年、信濃・上野・下野・武蔵・相模・岩代など7か国の蚕種商人が八王子に集まり、種紙の寸法をはじめ営業上の取り決め規約を結んだ。

武蔵国各地では当初、下総国結城地方や信濃国上田地方で作られた蚕種を購入していたが、18世紀半ばから奥州伊達郡の蚕種に代わった。

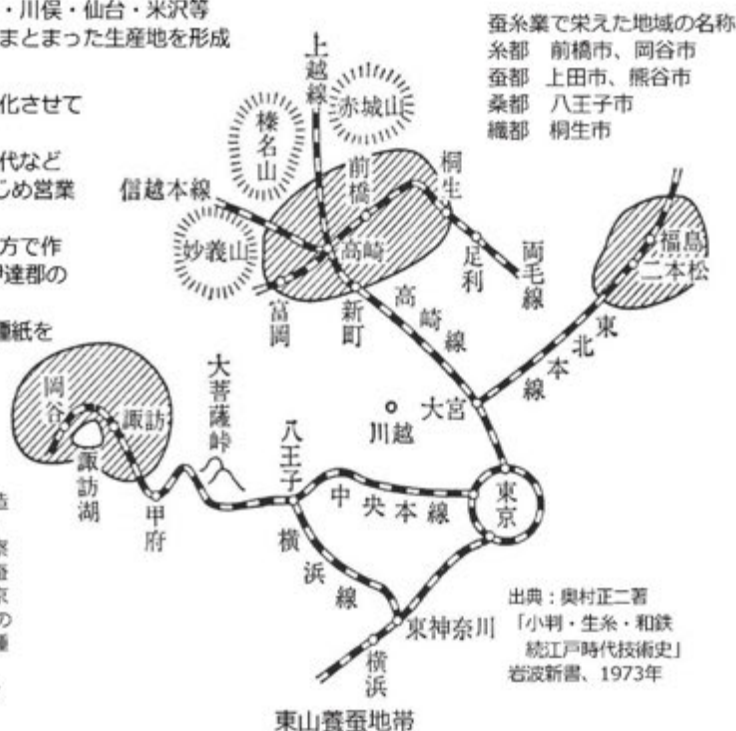
1900(明治33)年、蚕の微粒子病予防のため、一枚の種紙を28区に分けた框製の産卵台紙を使うようになった。



図の番号が飛んでいるのは、病気が見つかったものを排除して差し替えたため。

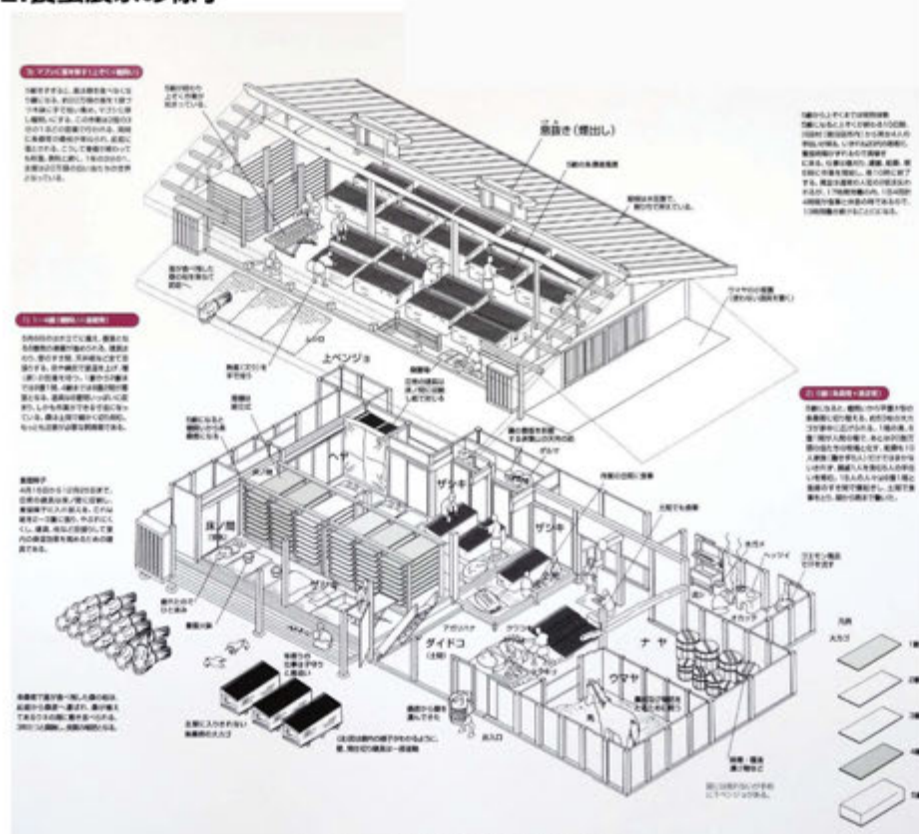
高橋治平は福生村の蚕種製造業者。養蚕業の先進地域であった長野や群馬などを視察し、その技術を取り入れ、蚕種の改良に取り組んだ。東京府内では中神村(現：昭島市)の東京蚕種合名会社につく蚕種製造量であった。

1926(大正15)年には、羽村の下田伊左衛門が設立した「成進社」の社長となり、西多摩の養蚕業発展に尽力した。



出典：奥村正二著
「小判・生糸・和鉄
続江戸時代技術史」
岩波新書、1973年

2. 養蚕農家の様子



出典：前橋市蚕糸記念館の展示パネル

飼育方法による蚕室の区分

- ・清涼育
田島弥平が1872(明治5)年に「養蚕新論」で提唱した養蚕技術。
田島弥平郎のように棟に沿って長く造られた「総やぐら」と呼ばれる形式が主流。蚕種(蚕の卵)の生産農家に特有。
- ・静温育(温暖育)
高山長五郎(高山社)が1883(明治16)年

- 飼育室が小部屋に間仕切られるのに対応して、小さく分割されて並べられるようになる。平屋は床面から気抜きまでの距離が近いので、一室に一つの気抜きが設けられる。天井が高く床面と気抜きまでの距離が遠い二階建の場合には、二室に一つの気抜きで十分効果が得られる。

- ・折衷育
開口の意匠が工夫され、個々に調節できる形式となるとともに、煙突効果によって排気効率を上げるため、流入口は大きく、流出口は狭くなっている。

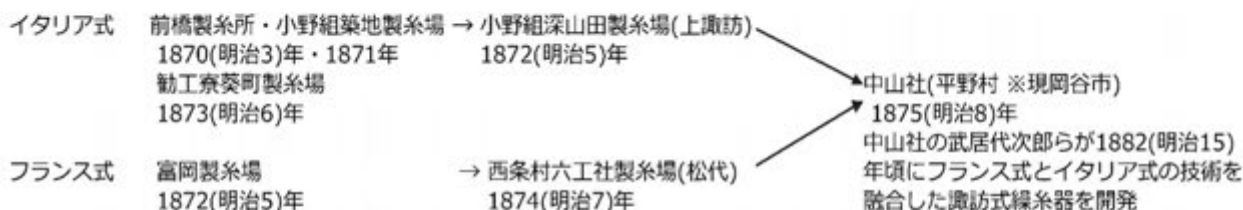
その後、条桑育では越屋根は不要となり、既存の家屋が清温育等をしていた名残として残されたものが多いと言える。

上記区分については、内容、普及時期も地方により違いがあるため、一概には扱えない側面もある。

群馬県内では、昭和に入ってから建築された養蚕家屋もあり、区分と一致しないものもある。

3. 器械製糸の発展

1872年の官営富岡製糸場や、それに先行して設立された1870年の藩営前橋製糸所、1871年の小野組築地製糸場の影響を受けて、器械製糸場が各地に設立されていくが、その中心になったのが長野県であった。1879(明治22)年の器械製糸場の数は全国で655あるが、その54%(358工場)が長野県に集中していた。長野県における器械製糸の発展は、諏訪郡平野村(岡谷市)の中山社がその基礎を築いたとされている。



前橋製糸所 1878(明治11)年当時(西内庁書院蔵)



初めは住吉町の広瀬川近辺に作られ、3ヶ月で岩手町の風呂川近辺に移転



西条村六工社製糸場
信濃国埴科郡西条邑六工製糸場の図
(長野県立歴史館)



小野組築地製糸場

東京築地船場いまい大仕掛け繰糸器を取る 歌川芳虎画 1872年



諏訪式繰糸器
(岡谷蚕糸博物館)

4. 器械製糸と座繰製糸

織物：経糸(たていと)と緯糸(よこいと)で構成。織物を作る機械をみると、経糸が並んでいるところに緯糸の入った杼(は)という舟型の箱を左右に動かして織っていくので、とくに経糸はしっかりした糸である必要がある。

日本の生糸：幕末維新期に輸出されたのは、繭から取り出した糸を撚りをかけながら巻き取っていく座繰器によって作られた座繰糸。蚕の微粒子病のためにフランスやイタリアの生糸が打撃を受けた時期には、座繰糸でも上州座繰糸のような高い品質のものは経糸にも使われた。フランスのバスツールの研究によって微粒子病の蔓延が押えられた明治初年になると、イタリアの器械製糸業が復活し、日本の座繰糸は粗製乱造だとして経糸には向かないとされるようになった。

このため、欧米市場で経糸に使われる生糸を作るために、富岡製糸場に代表される、ヨーロッパの最新器械製糸技術が導入された。

いち早く器械製糸を導入した長野県諏訪地方で生産された生糸は「信州一番」と呼ばれ、日本出生糸を代表する標準的なブランド品だったが、世界市場では経糸用の「優等糸(エキストラ)」ではなく、緯糸に使う「普通糸」として評価された。片倉製糸のような製糸家も、明治期においては、手間をかけて高く売れる経糸用の「優等糸」を作るよりも、安いコストで緯糸用の「普通糸」を大量生産する経営方針を取ったのである。

1900年代後半には日本の出生糸は欧米市場でイタリア系、中国系を抜いて世界最大の輸出量になるが、あくまでも数量の話であり、品質ではトップとは言えなかった。世界最大の生糸輸入国アメリカの輸入生糸の1908年当時の用途によれば、フランス・イタリア系と中国上海糸は全てが経糸用に使われていたが、日本生糸で経糸用に使われたのは51%であった。



座繰器。繭から糸をつむぐ歯車のついた糸繰りの道具。糸引き、糸とりともいう。18世紀後半に発明され、幕末から大正時代ごろまで養蚕農家で使われた。繭から糸口をとり出し、ワグにまきつけつける。天保年間(1830~1843)より、川越の水村金蔵の木屋製作所で作られたものが多摩地域には多い。

※木屋製作所は、金属を主原料とした自動車部品農機具の製造会社として毛呂山町で操業中。

<https://kiya-ss.secsite.jp/gaiyou.html>

1894(明治27)年には器械製糸の生産高は座繰製糸による生産高を追い越したが、福島、群馬等の古蚕国ではその後も依然として座繰製糸の優勢が続き、全国的に座繰製糸による生産高の減少傾向が現れるのは、1899(明治32)年以降である。

群馬県では、地域の養蚕農家で組合を作り、集荷した生糸を品質別に揚げ返す(巻き直す)ことで糸を均質化したり、組合員に品質管理を呼びかけたりして高品質の生糸を生産するようになっていく。碓氷社・甘楽社・下仁田社の南三社が組合製糸として有名で、1901(明治34)年には横浜への出荷個数が他に抜き出る成果を示すが、1905(明治38)~1906(明治39)年になると、器械製糸の片倉組に追い抜かれていくことになる。

福島県の場合、器械製糸が座繰製糸を凌駕するのは1915(大正4)年であり、座繰が根強かったということがうかがえる。



奥州座繰器



上州座繰器(弓有)



二つ取り上州座繰器(弓無)

下仁田地方の養蚕製糸の特徴

大河原順次郎（元下仁田町教育委員会教育課長）

1) 上州座繰りと組合製糸

関東山地の北の縁に位置する下仁田は山間部の狭隘な地かつ河岸段丘の上位面で稲作不適地であったことから農業を支えたのが麻の栽培や養蚕でした。下仁田地方では江戸時代より座繰りを使用して「下仁田提げ」と呼ばれる提げづくりの横浜でも有名な糸を生産していました。

繭出荷ではなく糸に紡ぐまでが農家の仕事で、日本の生糸の需要が高まる時期に農家は数軒集まって組をつくり、組同士が集まった会社組織を立ち上げ生糸の品質向上と糸価の対策を行いました。明治13年には下仁田周辺の組も加入した甘楽製糸社が設立され、その後、金融面や集出荷の関係から明治26(1893)年、下仁田社として独立しました。下仁田社の組織は全国的に見ても上位にあり、最盛期には群馬はもとより長野・新潟・岩手の組も加入していました。

ここに明治34(1901)年、生糸生産量が中国を抑え世界一の輸出国となる直前の横浜入荷生糸量上位10社を挙げます。

【表1】

記載については順位、産地、種類（生産方法）、荷主、出荷量（個）の順となっています。1次資料は『横浜市史』ですが時間の関係もあり下仁田町歴史館の展示資料から抜粋しました。

【表1】

順位	産地	種類	荷主	出荷量（個）
1	岩代	折返	共同荷造所	9,000
2	上州	座繰	碓氷社	6,000
3	上州	座繰	甘楽社	5,000
4	岩代	折返	協立荷造所	4,000
5	上州	座繰	下仁田社	2,500
5	上州	座繰	交水社	2,500
7	信州	器械	竜上館	2,400
8	信州	器械	俊明社	2,000
9	武州	座繰	上水社	2,000
10	相州	器械	盛進社	1,800
10	甲州	器械	矢島組	1,800
10	信州	器械	岡谷製糸	1,800
10	武州	座繰	改伸社	1,800
※20	上州	器械	富岡製糸	1,000

※1次資料：『横浜市史』第4巻上85頁

※単位（個）について：1個＝9貫＝33.8kg

※太字碓氷社、甘楽社、下仁田社は上州南三社と呼ばれ、20位の富岡製糸場が民間移行されたばかりとはいえ、三社で富岡製糸場の13.5倍の糸出荷量となっています。

2) 主要製糸県生産高と器械化率

先に書いたように群馬（上州）の特徴は上州座繰りと組合製糸にありました。座繰り製糸は従来の製法のため、粗製乱造だったと懸念されやすいですが各農家で引かれた糸は小枠で持ち寄られ、太さや色などを揃え、大枠に揚げ返し詳細な検査がされ品質も保たれました。その結果が【表1】のとおり器械製糸による糸量を岩代（福島県伊達郡・安達郡）の折返しを含めた座繰り糸が大きく上回ることとなりました。



歯車の組合せに特徴がある上州座繰り器
小枠に巻きとられた糸は小枠ごと製糸組
合に持ち込まれました



小枠から大枠に巻きとる揚げ返し機
揚げ返し場では水車動力を利用しました
この作業には生糸の水分量の調整の
もありました

【表 2】主要製糸県生産高と器械化率

県名	生産量	明治 24 年	明治 29 年	明治 34 年	明治 39 年	明治 44 年
長野	器械化率	84%	93%	93%	95%	97%
	生産量	214, 025	323, 039	392, 100	522, 599	861, 380
岐阜	器械化率	86%	93%	89%	85%	75%
	生産量	56, 363	63, 490	74, 973	99, 377	179, 899
山梨	器械化率	70%	80%	74%	84%	82%
	生産量	65, 691	69, 460	78, 643	117, 735	173, 972
愛知	器械化率	69%	88%	87%	83%	93%
	生産量	16, 231	43, 056	68, 446	107, 439	239, 846
山形	器械化率	37%	37%	34%	53%	67%
	生産量	46, 042	50, 549	57, 837	76, 169	107, 095
埼玉	器械化率	11%	20%	29%	61%	72%
	生産量	45, 958	55, 485	80, 385	127, 788	178, 343
福島	器械化率	8%	12%	13%	16%	35%
	生産量	85, 508	92, 452	111, 465	101, 848	144, 150
群馬	器械化率	6%	21%	10%	18%	35%
	生産量	202, 504	187, 090	200, 298	137, 552	260, 515
小計	生産量	732, 304	884, 621	1064, 147	1290, 907	2, 145, 190
全国計	器械化率	40%	56%	59%	68%	75%
	生産量	1, 116, 422	1, 442, 720	1, 750, 427	2, 063, 603	3, 222, 539

※1 次資料は横浜市長 ※生産量の単位は貫

明治 5 年に西欧の技術を導入し建造された官営模範工場「富岡製糸場」、明治後半に入ると西欧の技術を取り入れた器械製糸が全国で展開されます。器械化への取組みが早かったのは長野、岐阜、山梨、愛知の 4 県で器械化が遅れた福島、群馬は先に述べたとおり座繰り製糸が盛んであった両県でした。【表 2】

上州座繰り器は木製の歯車を利用し、奥州座繰り器はプーリーとベルトを使い力の伝達、巻き取り速度を調整する仕組みでした。

群馬の器械製糸への移行が遅くなった理由は下仁田提げ糸を含む組合製糸の座繰り糸の評価が横浜で高かったこと、器械製糸工場は大きな資本を必要とし、養蚕農家がつくった組合製糸では器械製糸の移行へ踏み切ることが出来なかった事等が挙げられます。下仁田社が器械製糸に梶を切ったのは明治 4 3 年の大水害で沢沿いにあった水車動力を使った揚げ返し場が流失、崩壊したことからで、器械製糸への移行は災害の歴史でもありました。下仁田社は揚げ返し場の再建ではなく、器械製糸への道を選択しました。

3) 群馬の養蚕と養蚕農家住宅

下仁田にも古い養蚕農家住宅が残っています。群馬の養蚕は世界遺産となった『富岡製糸場と絹産業遺産群』の構成資産のひとつ「田島弥平旧宅」は清涼育を推奨し、もうひとつの「高山社」は清温育を推奨していました。両者の共通点は蚕室の換気にあります。高山社（蚕業学校）には朝鮮半島をはじめ全国から生徒が集まっていたことから推奨した清温育は全国に広がりを見せました。その特徴は屋根の上に換気のための「やぐら」「天窓」などと呼ばれる換気のための構造が見られます。やぐらに設置された窓の開閉により換気を促進する仕組みです。屋根の吹き替えなどにより数は少なくなりましたが、やぐらの乗った多層階の養蚕農家を今も見ることが出来ます。



下仁田町小坂地区の養蚕農家住宅
(登録有形文化財)



下仁田町馬山地区の養蚕農家住宅



下仁田町馬山地区の養蚕農家住宅

1 階が生活の場となり 2 階 3 階が蚕室となっていました。この地区には多くの養蚕農家住宅が今も残っています

戦後復興のためにつくられた「上毛かるた」で「ねぎとこんにやく 下仁田名産」と詠われているように下仁田ねぎとこんにやく栽培が盛んな地でした。品種改良も進み機械化が進んだことから、こんにやく栽培の中心は榛名山の噴火物が厚く堆積した群馬県の北部に移りましたが、今も下仁田はこんにやくの集散地として精粉業が営まれ、こんにやく精粉の多くは下仁田から全国に出荷されています。

ご承知のとおりこんにやく芋は単年では出荷ができません。秋に掘り上げた種芋を凍らせないように、南向きの陽当りの良い斜面地に穴を掘り、土をかけ保存する「土囲い」と農家の 2 階に保存し、1 階の生活の場所で火を焚き、温度を確保する「火囲い」という方法がとられて来ました。種玉は春に畑に植えられ秋に掘り取り、この作業を 2 年から 3 年繰り返さないと出荷できません。掘り上げられたこんにやく芋は少なくとも 2 回、冬を越す必要がありました。養蚕農家の 2 階は「火囲い」の場として適した構造でもあり、こんにやく栽培と養蚕の複合経営を行うのに適した造りでもありました。

高山社が推奨した清温育では梅雨の時期や肌寒い日に蚕の食べる桑の量が減った時には囲炉裏や火鉢などで暖を取りました。こんにやくの種芋の冬保管も同様に行われました。下仁田の農家の 2 階は春から秋にかけては蚕室として蚕が桑を食み、冬期はこんにやく種芋の寝室となっていました。

各地で養蚕農家住宅には工夫が凝らされていると思いますが下仁田で見られる養蚕農家住宅には 1 階より 2 階、3 階が広くなるような梁の使い方がされ、また、大黒柱と大きな梁で構成し間柱の数を少なくする工夫がされています。

今回の主催地となる白川郷の合掌造りも降雪にも耐え養蚕にも適した構造と聞いています。飼育方法も群馬から発信された「清涼育」「清温育」だけではなく、養蚕が盛んであった地域の数だけ飼育方法、桑の種類、糸の仕立て方まで工夫され特徴ある養蚕農家住宅も地域の数だけ存在したと思っています。

文化庁のホームページに国内の世界遺産に関する頁があります。『富岡製糸場と絹産業遺産群』が世界遺産登録（平成 26 年【2014】）され、今年度 10 周年を迎えました。構成資産「荒船風穴蚕種貯蔵所跡」を持つ下仁田町の一職員として登録から保護保存活動に携わった身として、その大変さを実感してきました。シルクロードネットワークの会場となる白川郷については世界遺産「白川郷・五箇山の合掌造り集落」（平成 7 年【1995】）は国内で 6 番目の登録で 30 周年を迎えたとのこと。現在はインバウンドも含め、賑わいを見せていることもテレビを通じて拝見しています。住まわれている方々、行政の方々の努力に敬意を表します。保存活動は今後も続きます。地域にとっても住んでいる方々にとっても世界遺産となったことを喜べる活動とし、後世に引き継いで行きたいものです。

現在、江戸時代の畑を確認することはできないが遺跡発掘調査で江戸時代の畑を確認することができた。遺跡は群馬県渋川市に所在する中村遺跡である。

今回紹介するのは浅間山の天明三年(1783)の噴火に伴う土石流により、厚く土砂を被ったことにより、当時の作物を含めた地面がそのままの状態で保存されていたものである。養蚕に関わる資料ということで、畑でみつかった桑について紹介する。

1) 中村遺跡

中村遺跡は関越自動車道の渋川・伊香保インターチェンジのあるところで、昭和 57 年～58 年に渋川市教育委員会が関越自動車道自動車道建設の事前に発掘調査を実施した。

中村遺跡発掘調査で発見されたのは、弥生時代の円形周溝墓、古墳時代初頭の浅間C軽石層に埋没された畑跡、古墳時代中期の榛名山噴火に伴う降下火山灰に埋没した 5 世紀末（497 年頃：ウィグルマッピング法による実年代）の水田跡、同後期の榛名山噴火に伴う降下火山灰に埋没した 6 世紀中頃の噴火に伴う降下火山灰に埋もれた水田跡、7 世紀後半の横穴式古墳 1 基、奈良平安時代の集落、中世の竪穴住居で構成された集落跡、天明三年（1783）の浅間山の噴火に伴う土石流により地表下 3.5m に埋もれた江戸時代の耕作地で畑・水田などで、異なる時代の遺跡が発見された複合遺跡である。



図 1. 中村遺跡発掘調査現場 道と畑（畝）

2) 天明三年の浅間山の噴火と被害

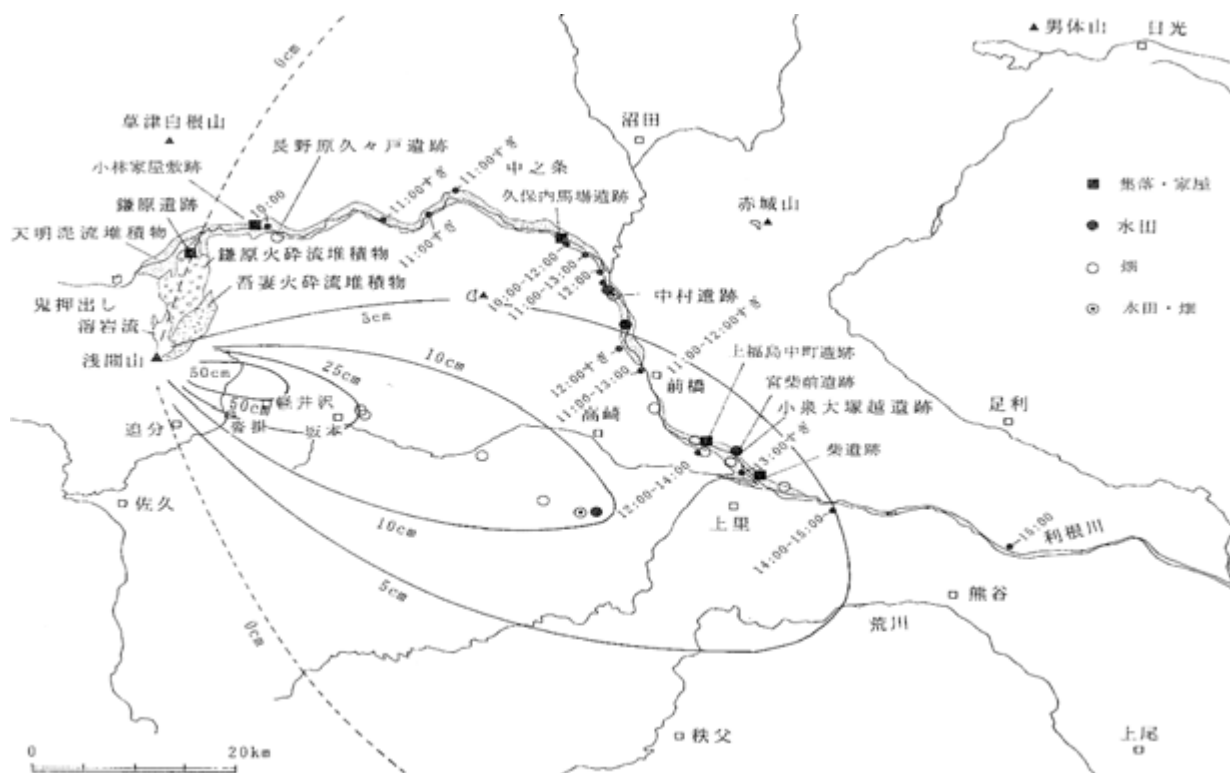


図 2. 浅間火山 1783 (天明 3) 年噴火の噴出物・火山泥流代表的被災遺跡の分布（早田 1995 に加筆） 時刻：火山泥流（天明泥流）の到達時刻(8 月 5 日)

榛名山や浅間山の噴火に伴う降下火山灰や土石流に埋もれて、同一時間で遺跡は被災し当時のそのままの状態で検出されている。

中村遺跡の最大の特徴は、発掘調査で天明3年(1783)7月8日の土石流厚さ3.5~4.0mに覆われてしまった畑・田・道・溝・用水などが調査された。この土石流に覆われたのは、浅間山が噴火して北西方向にあった鎌原村を埋没させ、そのままの勢いで吾妻川に流れ込み、一旦川を堰き止め自然ダムを形成した。そのダムは一気に決壊して吾妻川を流れ下り、北東から流れてきた利根川と渋川市の中央で合流、左岸側は崖壁で右岸は低くなっていることから土石流は、右岸に押し寄せ岸を乗り上げた結果3.5~4mの厚さで堆積があり、第一河岸段丘で止まっている。この時中村は河岸段丘上と河岸段丘下にあったが、河岸段丘下にあった半分の村はこの土石流で埋まっている。被災状況は449人中24人が流死、家屋は106戸の内74戸が流出、耕地は全体の約4分の3の242石が埋没している。

日本の火山災害史上で犠牲者が一番多いのは長崎雲仙普賢岳寛政四年(1792)死者15,000名、2番目に多いのが浅間山天明三年(1783)1,500名である。この大規模な噴火で火山灰が成層圏に達して太陽の光が遮られ農作物の不作が「天明の大飢饉」の発端となったとも言われている。

3) 江戸時代の畑と桑

江戸時代の調査面積は約24,780㎡の内、畑は200枚(18,937㎡)、水田は25枚(2,489㎡)、その他、道・水路・川等である。(図3)

畑は約200枚発見され、一枚の畑の形状は方形や長方形・台形・不定形で大きさが最小は109㎡で最大が196㎡の大きさである。畑の作物は緑色をした大豆と確認でき茎・葉・莢が検出された。莢には豆の膨らみがあり、3粒のものが多く確認された。(図5)土石流に畑のみこまれてしまったことから流下方向に大豆の株はなぎ倒されている。

その中でも注目されるのは、畑の周りに桑が植えられている。いわゆる「畔桑」「境桑」「周り桑」である。全ての畑の周りに桑が植えられていたわけではなく、場所は限られた畑に植栽されている。具体的には、道・水路に接した畑回りには桑が連続して周り桑として植栽されている。

畑が面々と続く所には桑の植栽は認められない。蚕の餌となる桑の葉の収穫が楽となる道等の作業導線に近い畑に多い。

当時は畑に植えられた作物の種類で年貢が掛けられていた。

中村では畑作付けは大豆・里芋等が確認されているが、桑の取り扱いは年貢の対象とはならないものである。

農家は、この桑で蚕を飼育し繭を生産していたようである。

桑は30~40cm間隔で植えられ、水路側の土手などには一列ではなく、2~3列に植栽している。道・水路の端にも認められ、これら構造物の補強の一助を担っていた。

桑の仕立ては、株別れする個所を下の方に設けている地域は、霜が降らない地域で、株を高くするのは霜が降る地域であり、桑の葉を守る地域の工夫である。

中村では、株高は股下以下であり、霜の被害を心配しなくても良い地域の仕立て具合であり、桑は良好に手入れが行き届いている。



図3. 中村遺跡 道・水路

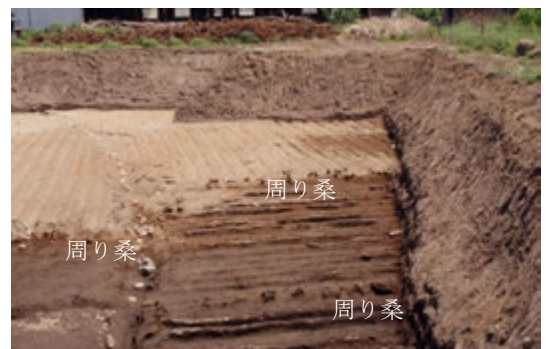


図4. 中村遺跡畑と周り桑



図5. 出土直後の青大豆

昭和期の養蚕は早生・春蚕・夏蚕・秋蚕・晩秋・晩々と1年に何回も行われているが、江戸時代は、1年間に1回の繭を生産していた。農家の中でも裕福な者がこの桑を栽培していたものとする。

この畑を被災させたのは浅間山が噴火天明3年(1783)7月8日のおよそ正午ころである。水田では稲苗が田植えされ、膝上まで成長していた状態で水田面には、ガン爪で田の草取りをした爪跡が残されていた。また、畑の大豆について泥流を取り除いた瞬間は、大豆鞘に実が入った緑色の状態で発見されたが、直ぐに酸化して茶色に風化している。(図6)



図6. 出土大豆が空気に触れて茶色に変色

被災期日と田畑の状況は一致している。

桑の状態まで観察が行き届かないのは、表土から江戸時代の畑まで土石流が3.5m被っていたため重機(バックホー0.7m³)でこの土を取り除いたため桑については掘り取ってしまったものもあったようである。

4) 農家の現金収入

享保の改革(十八世紀前半)後、畦の傍ら1尺(約30cm)は「畦引(畦除)」と呼ばれ年貢は免除されていた。農民は年貢を納めずに、桑を栽培し絹を生産しようとする副収入(現金)を得ている。

中村遺跡のA区の畑には、地境に桑を巡らせた形で発見された。これは、周り桑・境桑・地境桑と言われる現在のものとも似ている。

また、川岸にヤマグワ4点があり幹回りが40~50cmの大きな桑であり、自然植生と考えられる。この葉を摘み取って蚕を飼育したのは当然考えられることである。

今回は天明三年の浅間泥流にパックされた江戸時代の畑について、絹の生産に必要な桑の状況が全国で初めて発見されているので報告するものである。

天明三年の畔桑を発掘調査により、現代に実際見ることができた。

※「三島村村誌」には、天正十八年(1590)年真田伊賀守信幸を領す。天和二(1682)年直に徳川氏に隸し、代官を以て支配し」とある。

耕地は「田反別 八町四反五畝十四歩(83,848 m²)、畑 一二一町六反三畝二十九歩で(1,205,344 m²)、物産は「繭一四八二貫(5,557.5キログラム)」当国群馬群」渋川・高崎・前橋とある。

※このように繭の生産は群馬郡(渋川を含む)において記録で残されている。中村遺跡で発見された畔桑が、群馬郡全域で繭5,557.5キログラムを生産させた、桑の植生の実態が明らかになった。

参考文献：渋川市教育委員会編『中村遺跡』 添付の写真は同報告書所載のものを使用した。

前橋市の養蚕及び就労継続支援 B 型事業所カラフルの取り組みについて

村上雅紀(上州文化ラボ)

■前橋市の養蚕について

現在の養蚕状況について、JA 前橋市で養蚕を担当されている楠由輝夫さんにお話をうかがいました。楠さんとの親交は 2014 年に前橋の養蚕についての取材で JA 前橋市大胡稚蚕人工飼育所を訪れたことにはじまります。徹底した清浄環境の維持、温湿度の厳密な管理を四六時中 24 時間体制で行い稚蚕飼育をされていたことを思い出します。稚蚕飼育の期間、掃立から配蚕までの 10 日間は飼育所にひとり泊まり込みかいこに、環境に気を配られていました。経過のそろった丈夫なかいこを農家の方に届けるため強い使命感を持って従事されていたことに感銘を受けました。人工飼料で育てられた 3 齢 3 日目のかいこは、その後、養蚕農家の方のもとで桑育で大事に育てられます。配蚕後の飼育所は次の稚蚕飼育のため厳重な消毒を行います。大胡の稚蚕飼育所では春蚕、第二春蚕、夏蚕、初秋蚕、晩秋蚕、初冬蚕と 5 月から 10 月にかけて 6 回の稚蚕飼育が行われていました。施設の老朽化、養蚕規模の縮小等の理由で大胡稚蚕人工飼育所が数年前に閉鎖されて群馬県の稚蚕飼育は富岡市の小野人工飼料育センターの 1 ケ所のみとなりました。現在、楠さんは引き続き JA 職員として養蚕に関わる様々な業務を行っています。



図 1. 飼育所の扉を開け春蚕の配蚕をする楠さん。帽子、マスク、専用の作業着、長靴を身につけて大切にかいこを送り出しています。

(2014 年・JA 前橋市大胡稚蚕人工飼育所)

■前橋市内の養蚕軒数

令和 6 年度 12 軒、令和 7 年度(予定) 10 軒養蚕に従事されている方の大半は 70 歳代以上の方が多く、ここ 10 年以内に新しく始めた個人、団体は 3 軒です。

- ・養蚕が行われている前橋市内の地域(令和 7 年度予定)富士見地区-2、宮城地区-2、桂萱地区-1、芳賀地区-2、大胡地区-2、荒砥地区-1、市内北部から東部にかけての丘陵地帯で行われています。
- ・前橋市内で飼育されている品種ぐんま 200、春嶺鐘月、錦秋鐘和、なつこ、小石丸、原種(ぐんま、200)
- ・蚕期(5 月中旬から 11 月初旬頃)春蚕、夏蚕、初秋蚕、晩秋蚕、初冬蚕の 5 回。大半は春夏晩秋の 3 回。
- ・集繭量(令和 6 年度・前橋市) 5320kg 箱数 133.5 箱令和 6 年度の晩秋蚕において膿病が多く発生したため収繭量が大きく落ち込みました。前橋市以外の県内全域及び近県地域でも被害が報告されています。
- ・蚕種、稚蚕飼育、養蚕、製糸の流れ

上田蚕種株式会社(長野県上田市)、株式会社高原社(長野県松本市)→ JA 甘楽富岡・小野稚蚕人工飼料育センター(群馬県富岡市)→前橋市内の養蚕農家→碓氷製糸株式会社(群馬県安中市)、松澤製糸所(長野県下諏訪町)、出荷先の大半は碓氷製糸になり、一部が松澤製糸に出荷されています。

群馬県蚕糸技術センター(群馬県前橋市)から委託を受けた前橋市内の農家 3 軒では春蚕の時期、原種(ぐんま、200)の飼育を行い、この繭は群馬県蚕糸技術センターに蚕種製造目的で出荷されています。

・課題や展望

従事されている方の高齢化。後継者不足。後継者も指導者も育たない状況になってきています。その要因として養蚕だけでは生計を立てることが難しく収益性のことがあります。また、新規に養蚕を始める際、飼育環境や桑畑、蚕具の確保と、状況によっては多額の費用と長い時間を要します。桑を新植してから養蚕飼育で桑葉をまともに使えるまでに 3 年かかると言われています。また、養蚕飼育のさまざまな作業においてひとりで行うよりも 2 人もしくは複数名で行うことの方が作業効率が良いこともあり人手の確保も課題です。

・新たな取り組み

遺伝子組み換えカイコ→医療品や化粧品向け、蛍光絹糸、かいこやさなぎを食用に利用する試み。

■就労継続支援 B 型事業所カラフル 2024 年度の養蚕について

渋川市北橋町にある就労継続支援 B 型事業所カラフルを運営されている NPO 法人カラフル理事長の大山剛さんに事業所で取り組まれている養蚕についてお聞きしました。大山さんは群馬県が開講しているぐんま養蚕学校の第一期生で受講修了後の 2017 年より養蚕を始めました。当初はぐんま養蚕学校と一緒に受講した仲間と共同の施設で始めその後、渋川市北橋町の事業所敷地内に軽量鉄骨の建物を建ててそこで行って来ました。養蚕の規模をより大きくしていくため現在は前橋市富士見地区にある牛舎跡地で行っています。

大山さんとの出会いは 2016 年か 2017 年頃、大山さんが大胡地区で管理されている桑畑で桑の剪定や畑の耕運を行うなど養蚕を行う準備をひとりで地道にされている頃でした。その後、養蚕を始め試行錯誤を繰り返しながら少しずつ飼育量を増やしてきました。その間、施設内に作った専用の部屋での稚蚕飼育や、蛹油の抽出や織物の試行など様々な試みを行って来ました。現在、群馬県から原種のかいこの飼育を委託されています。蚕種製造に関わる原種のかいこは信用のおける養蚕農家の方に委託するもので、着実に培われてきたかいこの飼育技術が評価されてきたことを意味します。年々地道に行われてきたカラフルの養蚕は養蚕業界、蚕糸業界を支える取り組みになってきています。

・飼育された品種及び箱数(1 箱—3 万頭)

200(原種)—1.5 箱、ぐんま 200—9.5 箱、錦秋鐘和—3 箱

・出荷先について

200(原種)→群馬県(蚕糸技術センター) 種繭、ぐんま 200→JA(碓氷製糸)と自家消費(蛹は蛹油、切繭は絹紡糸にする予定)、錦秋鐘和→他社に販売(昆虫食)

・薬害などイレギュラーなこと

春と晩秋蚕に薬害有(ひどくはなかったが 5 齢中に 1 割ほど処分)、原因はわからないが県内外の取繭量は非常に少なかった。

・来年度の予定

2024 年度とほぼ同様

・課題、展望、新たな取り組みなど

障がい者の就労支援の一環として養蚕を行っているので、基本的には就労訓練を兼ねた伝統継承の意味合いが強い。その中で、碓氷製糸に出荷することをメインに、自家消費(糸以外の用途での製品化)を行っていく。自家消費の中で、切繭が一定量貯まったら紡績工場で絹紡糸→機織り→製品販売。蛹→蛹油→石鹼など。

条桑育を続けるかぎり、薬害の不安は常にある。他の農家に農薬を使うなどとは言えない。

・養蚕への思い

養蚕農家でも営利団体でもなく、福祉事業を行っている NPO 法人として。



図 2. 養蚕飼育施設(前橋市富士見地区)



図 3. 養蚕(条桑育)の現場(5 齢期)



図 4. 上蒔後の様子

- ① 群馬県は、養蚕とのかかわりの濃い歴史があり、形が変わっていくとしても、できるだけ養蚕に関する技術や文化を後世に残していきたい。
- ② 障がい者の就労支援という側面では、働くことの対価は金銭だけではなく、養蚕をしていることで生まれる地域との交流や地域からの応援など、「つながり」とか「自尊心」とか「アイデンティティ」のようなものを生み出す貴重なもの。

■取材を終えて

群馬県のみならず日本の基幹産業であった蚕糸業のなかでも「いと」のもとをつくる「かいこ」の飼育をする養蚕は極めて重要で尊い営みです。養蚕・製糸業が盛んであった前橋市は現在稼働している製糸工場はなく、養蚕をされている方も数えるほどになってきました。今回、お話をうかがいましたカラフルのみなさんをはじめ養蚕を行われている方々は、よい繭を多く収繭するため、日々、温湿度の管理や衛生面でもたいへんな気を使い、また桑畑に何度となく桑を刈りに行って戻ってくるというサイクルを続けています。けっして楽な労働ではなく、また経済的に恵まれている訳でもありません。養蚕に従事されている方々の献身的な営みで、国産シルクが存続できていることをあらためて感じました。養蚕の営みだけをとってみたいへんな労力を要していますが、ひとつの製品が出来上がるまでには気が遠くなるような圧倒的量的手仕事のリレーが必要不可欠で、従事されているみなさまに、お蚕様に、感謝の念を抱きます。

大山さんのお言葉にありますように「自尊心」や「アイデンティティ」というものが現在、蚕糸業に関わる方々にありこの強い思い、志に日本の蚕糸業は支えられているように思います。今回の取材で感じたこと思ったことを大切にまた糧に、今後も養蚕について関わりを持っていきたいと思います。

日々お忙しい中、取材にご対応いただきました楠由輝夫様、大山剛様に心よりお礼申し上げます。誠にありがとうございました。



図 5. 収繭毛羽取機の実演を行う

大山さん

(2024 年 10 月・旧安田銀行担保倉

養蚕民家は多層民家

中村 武（NPO 法人 街・建築・文化再生集団）

■養蚕民家とは

個人的な見解ですが、養蚕を主目的とした古民家（農家の主屋）を養蚕民家と表現しています。養蚕民家は住宅でなく養蚕工場であり、知人は牧場と呼んでおり、住人の住宅と呼びづらいのです。

養蚕民家が生まれたのは、幕末から明治に掛けて開港により蚕種、生糸が貿易の中心となった時期です。群馬の古民家を観察すると、特に茅葺き民家は幕末から明治に掛けて、2階と小屋裏を養蚕に適した改造を行っていました。所謂、赤城型、榛名型、兜造りと呼ばれている養蚕民家です。さらに茅葺き民家の2階柱を継ぎ足し、総2、3階建て、板葺き或いは瓦葺きの養蚕民家に改造した例もあります。

21頁の田中和夫氏のレポートに群馬の養蚕民家での養蚕の様子が報告されています。1階、2階とも蚕棚（コノメ）が組み立てられ、1階から小屋裏まで養蚕が行われています。人の寝起きは1階の蚕棚の隙間で行っていました。この様子は棚飼（い）から、条桑育（い）が主流となる以前を著しています。条桑育（棒飼）は昭和前期より行われていますが、全面的に採用されるのは戦後と考えて良いでしょう。条桑育は、庭にバラックと言われる簡易建物やシートで囲った部屋を造りその中で平飼（い）をします。この条桑育が普及することにより、養蚕民家の1階は住まいに開放されます。上族はあくまでも2、3階で行います。条桑育については上州文化ラボの村上さんの報告の中に状況写真があります。

明治後期まで、養蚕は春蚕の1回だけでしたが、飼育方法、風穴その後の冷蔵庫での蚕種保管方法の発達で、年数回の養蚕が可能となり、年に5回以上養蚕を行う農家もありました。年に半年くらいは蚕棚の隙間で寝起きする状態です。

■養蚕民家？以前

遡って、江戸時代前期は、絹製品は中国やインドからの輸入生糸や絹製品に頼っていました。貞享元年（1684）、幕府は輸入制限策を行い、国内の絹機業地は、それまでの輸入生糸から和糸に転換を迫られます。正徳三年（1713）には既に幕藩体制が財政破綻を起こしていたことから、御触書を出し、養蚕奨励策を進めています。この頃から全国的に養蚕が盛んになって行ったと思われます。群馬では正徳二年、馬場重久が『蚕養育手鑑』を著しています。この頃、養蚕と製糸は分業されておらず、農家が繭から糸を引き、各地の絹市に持ち込み取引をしていたようです。農家の農間稼ぎとして有力なものでした。

実際の養蚕規模を知る資料として、26頁の大塚昌彦氏は、江戸時代の周り桑（畦畔桑）の発掘事例を報告しています。前段の時期に近いものです。当時、桑畑として桑を栽培することは、蚕種製造を除き許可されず、周り桑のみで養蚕を行っていたようです。有る報告では1農家あたりの収穫量は10貫程度とあります。現在から考えると種約10g（20,000粒）、周り桑で飼育するとしたらこの程度でしょうか。

建物は、まだ養蚕を主目的として建てられたものではなく、1階は住まいとして使われ上屋2階と小屋裏で養蚕を行っていた程度と考えられます。これらの建物も幕末に蚕種、生糸需要の増大から養蚕に特化した建物に改造されます。



図1. 赤城型民家（前橋市重文関根家住宅）



図2. 2階の柱を根接ぎして増築した民家



図3. 1階の住居での棚飼（い）の様子



図4. 3階、小屋裏での上族の様子

■白川郷合掌造り養蚕民家

国指定重要文化財和田家住宅は18世紀に創建された建物のように、丁度、幕府が、養蚕を奨励した時期にあたります。但し、2階以上で養蚕を行うために作られたものではないでしょう。合掌造りは白川郷の風土、特に豪雪に気を配ったことから生まれたと考えた方が妥当でしょう。当時の養蚕は年に1度春蚕のみの養蚕です。蚕種は多くて2枚(40,000粒)、階上一杯養蚕を行う量ではないと思います。何冊かの合掌造り民家の調査報告書を拝見しましたが、階上の用途に言及するものは有りませんでした。やはり、合掌造り民家が養蚕民家になるのは明治以降ではないでしょうか。三島敏樹田島家養蚕展示館々長の見解と少し違います。岐阜県の収繭量は明治から昭和期にかけて全国の上位にあります。白川村最盛期、養蚕で賑わう合掌造り集落を想像してみたいと思います。

三島館長から、お聞きしたお話の中で、階上のお蚕さんを囲炉裏の熱と煙で燻して飼っていたと伺いました。実は上州(群馬県)の「いぶし飼い」という飼育法を、県北部の片品村の永井紺周郎、いと夫婦が発見し「紺周郎流伝習所」を設立、いぶし飼いの普及を図っています。蚕の硬化病予防に効果があったそうです。片品村も福島県境の山間部です。白川村と似たような環境の中で発見されたものかもしれません。まだ全国には様々な飼育法があるのでしょう。まだまだ見て歩かなければならない処は限りなくありそうです。

■養蚕民家は多層民家

白川郷合掌造り民家は、多層民家の典型です。著名なところでは山形県田麦俣の多層民家があります。養父市の3階建て養蚕民家もこの中に入れても良いでしょう。

合掌造りは屋根勾配が60度(関東では45度)あるので2階から上部に複数階の床があります。前述の通り、これは養蚕を目的として作られたのではなく、多層階は養蚕に適していたから養蚕民家となっただけと考えています。基本的に養蚕民家は1階が住まいで、2、3階、小屋裏が養蚕の空間です。群馬の大型養蚕民家の中で、桁行15間、梁間7.5間、総3階というのが存在します。これなどは明らかに多層養蚕民家です。その他、群馬各地に残存する瓦葺き総2階の養蚕民家は、すべて多層民家と言っても良いと思います。また、雪深い山間地では茅葺き、兜造りの大型養蚕民家もあります。これらも合掌造り民家や田麦俣多層民家にひけをとらないものと考えられます。この事があって、今和次郎先生の著作を捲っていましたが、東京都の西多摩に於て採取した民家の中で田麦俣と見紛う形態の民家がありました。もう手遅れですが、全国には風土に根ざした貴重な民家が有ったのでしよう。

■結語

雑駁な、思いだけを吐露した報告です。ひとつに養蚕に特化した民家を住宅と表現するのがずっと気になっていましたので書いてみました。また、白川郷を訪れるにあたって、中途半端ですが合掌造り民家についても養蚕を中心に考えてみました。

「白川郷の合掌造り民家は絹遺産の宝庫」というテーマは、白川郷の人達が集落保全に、言い表せない労力を掛けたことを受け止めながら学ぶ、という事と理解しています。未来に残さなければならない絹遺産は、私たちの廻りに数限りなくあります。シルクロード・ネットワークを通じて出来るところから一歩踏み出そうと思います。



図5. 重文和田家

写真提供 岐阜県白川村役場



図6. 今和次郎先生が西多摩で採取



図7. 群馬で調査した総2階養蚕民家

シルクロード・ネットワーク・横浜フォーラム2023記録

●見学会：横浜市山手地区西洋館見学会

【日時】2024年3月16日（土）13:00～16:30



図1：ベーリック見学



図2：エリスマン邸見学



図3：山手11番館見学



図4：横浜イギリス館集合写真

（写真撮影：田村 収）

●フォーラム

【日時】3月17日（日） 13:00～17:10

【会場】横浜みなと博物館 第1・2会議室

【開会挨拶】米山 淳一（公社）横浜歴史資産調査会常務理事）、星 和彦（NPO 法人街・建築・文化再生集団理事長）

【記念講演】「横浜の繁栄を支えた生糸貿易」西川 武臣氏（横浜開港資料館長）

【基調講演】「世界文化遺産「白川村合掌造り民家」は養蚕民家だった」三島 敏樹（白川郷田島家養蚕展示館館長）

【事例報告】高橋典子氏（横浜シルク博物館副館長）、加藤明氏（新庄市商工観光課クールジャパン新庄推進室長）、
千種 浩氏（元神戸市役所文化財課）、飯島 泉氏（甲州市会計課長）、秦 哲子氏（日野市ふるさと文化財）
佐藤 直翔氏（鶴岡市企画部政策企画課）、今井泰徳氏（群馬県南牧村）、藤井 美登利氏、シーラクリフ氏
（NPO川越きもの散歩、さいたま絹文化研究会）、佐々木 利幸氏（南砺市佐々木寺社建築（株））、岩崎 桂
治氏（前橋絹文化研究会）

コーディネーター：後藤 治（工学院大学理事長・（公社）横浜歴史資産調査会理事・RAC 理事）

総括・閉会 星 和彦（RAC 理事長・前橋工科大学名誉教授）



図 5 開会挨拶：米山 淳一



図 6 開会挨拶：星和 彦



図 7 西川氏記念講演



図 8 三島氏基調講演



図 9 加藤氏事例報告

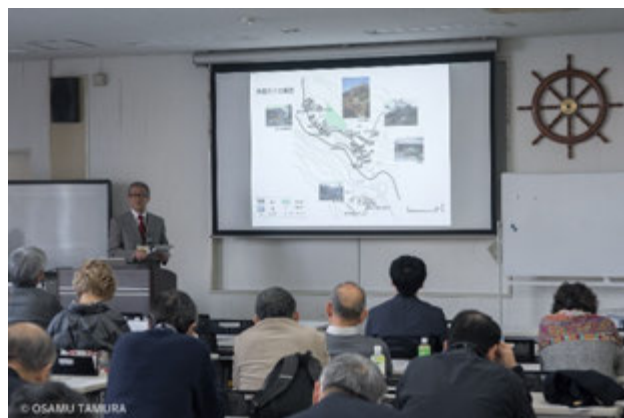


図 10 今井氏事例報告



図 11 藤井美登利氏、シーラクリフ氏事例報告



図 12 後藤治総括

写真撮影：田村 収

●シルクロード・ネットワーク 第6号 レポート目次

・横浜フォーラム 2023 スケジュール	6
・見学会コース案内図	7
・見学会 山手西洋館案内	8
・講師プロフィール	10
・横浜山手の歴史を生かしたまちづくり：米山 淳一（（公社）横浜歴史資産調査会）	11
・横浜の繁栄を支えた生糸貿易：西川 武臣（横浜開港資料館館長）	13
・シルク博物館について：高橋 典子（シルク博物館）	14
・田島家移築のあゆみ：三島 敏樹（旧田島家養蚕展示館館長）	16
・山形県新庄市 旧農林省蚕糸試験場新庄支場（新庄市エコロジーガーデン「原蚕の杜」）： 加藤 明（新庄市商工観光課クールジャパン新庄推進室長）	17
・未来へ紡ぐサムライゆかりのシルク：佐藤 直翔（鶴岡市企画部政策企画課）	18
・養蚕の隆盛をいまに伝える「上条集落」：飯島 泉（甲州市会計課長）	20
・信州から横浜港へ、そして世界へシルクロードを駆けるー：矢島 宏雄（シルクロード・ネットワーク協議会）	24
・2019年（令和元年）フォーラム開催地、南砺からのその後：佐々木 利幸（佐々木寺社建築株式会社）	26
・第29回 養父市ふるさと歴史講演会の開催：谷本 進（養父市教育委員会）	29
・百草園と生糸商人青木角蔵・三堀武蔵・森田友昇：秦 哲子（東京都日野市ふるさと文化財課日野郷土資料館）	30
・絹と和紙の町・小川町の動向：平山 友子（NPO 小川町創り文化プロジェクト（まちぶん）理事）	31
・シルクロード・ネットワーク in Yokohama 下仁田から横浜への絹の道： 大河原順次郎（元下仁田町教育委員会教育課長）	33
・＜シルクロード・ネットワーク 横浜フォーラム 2023＞群馬県南牧村から： 今井泰徳（群馬県南牧村総務部村づくり雇用推進課）	35
・関東のキリスト教と養蚕製糸：藤岡 一雄（NPO 法人 街・建築・文化再生集団顧問）	37
・英国で前橋生糸「マイバシ」に遭遇して～165年前の生糸が伝えること： 藤井 美登利（NPO 川越きもの散歩・さいたま絹文化研究会）	39
・生糸の街前橋：岩崎 桂治（前橋絹文化研究会）	41
・旧安田銀行担保倉庫、前橋乾繭取引所開設をめぐる考察：村上雅紀（上州文化ラボ）	43
・幕末から明治にかけて躍動した上州人：中村 武（NPO 法人 街・建築・文化再生集団）	45
・シルクロード・ネットワーク・神戸フォーラム 2022 記録：	47
・シルクロード・ネットワークの活性化にむけて：米山 淳一	50

●私たちの絹遺産のイメージ

□蚕種・養蚕・製糸に直接関わる建造物：

蚕種・養蚕民家及びそれに付随する建物、繭蔵（土蔵・れんが蔵）、蚕種・製糸・撚糸工場及び関連施設（水車、貯水槽、煙突、発電所等）、稚蚕飼育場、風穴（蚕種）、養蚕学校々舎・結社・各事業家の生家、居宅等

□蚕種・養蚕の生産に関わるもの：器械・器具、三分野（蚕種・養蚕・製糸）の技術、桑、桑畑、

□繭・生糸の販売、流通に関わる建造物：

絹・生糸問屋の店・住宅、生糸・繭蔵、繭・生糸市場（買場）・取引所・検査所等

□製品：絹織物（全国各地に伝わる絹織物）

□上記に関わる人物の物語、事跡、遺跡、遺物（渋沢栄一、尾高惇忠、田島弥平、片倉兼太郎、原富太郎（三溪園）等）

（例：群馬では、地域の資産家、豪農、指導者たちが、新しい日本を築くための思想（自由・平等・博愛の精神）

としてキリスト教を受容し、その精神は、養蚕製糸業の経営を支える大きな力となった。）

□運送・交通：運送業、鉄道、駅舎、河川、河岸

□集落：養蚕集落、絹産地で潤った町並

□信仰：神社等（蚕影神社、碑等）

□その他の建造物：絹産地で潤った飲食街、料亭等、娯楽・厚生施設（片倉館、岡谷病院）

□文物：養蚕指導書等、護符（新田義寄（温純）、徳純、道純、俊純の猫絵、少林山の縁起達磨等）

□習俗：養蚕製糸に関わる習俗、お祭り、お祝いの絵札等

ーシルクロード・ネットワークの活性化にむけてー

横浜は絹貿易拠点として栄え、現在の発展は絹によって築かれたと言っても過言ではありません。とはいえ、現代の都市開発の中で、絹産業の記憶が、正當に評価されることなく忘れ去られようとしている事実もあります。横浜には、絹産業が築き上げた建造物等の遺産や膨大なシルク関連資料、そうした資料の中にしか見られない多くの先人達の物語等が残されており、私たちは、これらを明日の横浜に伝えていくべき地域資産として考えています。そして、これらは横浜単独で出来たものではなく、多くの地域と結びつき、先人達の着想と努力で築き上げられたものです。横浜から絹の道を辿ると全国に及び、各地に蚕種・養蚕・製糸・織物・流通等の絹遺産が今も息づいています。また、富岡製糸場の世界遺産登録をはじめ、

近年、蚕種や養蚕で繁栄した町が重要伝統的建造物群保存地区に選定されたり、製糸工場や鉄道関連施設が重要文化財に指定されたりして、絹産業遺産が、重工業だけでなく日本の近代産業遺産として目を向けられつつあります。

こうした事実を踏まえ、絹文化の足跡を振り返り、文化遺産として将来に亘り継承していくことと、地域活性化の切り札として活かす手だてを多くの地域と連携して創り上げる為に、2015年3月に「シルクロード・ネットワーク協議会」を設立し、地域連携の第一歩として横浜フォーラムを開催いたしました。その後、山形県新庄市、福島県福島市、昨年は山形県鶴岡市と連携の環を拡げて参りました。そして、今年は富山県南砺市で開催いたします。

これからも全国の絹関連団体や市町村と連携を深め、将来にわたり絹文化の調査、保全、活用提言等に邁進いたして参ります。つきましては、是非、「シルクロード・ネットワーク協議会」へ、皆様のご協力、ご参加をお願い申し上げます。

米山 淳一



国指定重要文化財 氷川丸昭和5年（1930）横浜ーシアトルを結ぶ貨客船として建造。生糸専用の船室を設置。

写真：米山淳一

<ご入会案内>

1. 年会費 毎年4月1日～翌年3月31日

個人会員 3,000円

団体会員 12,000円

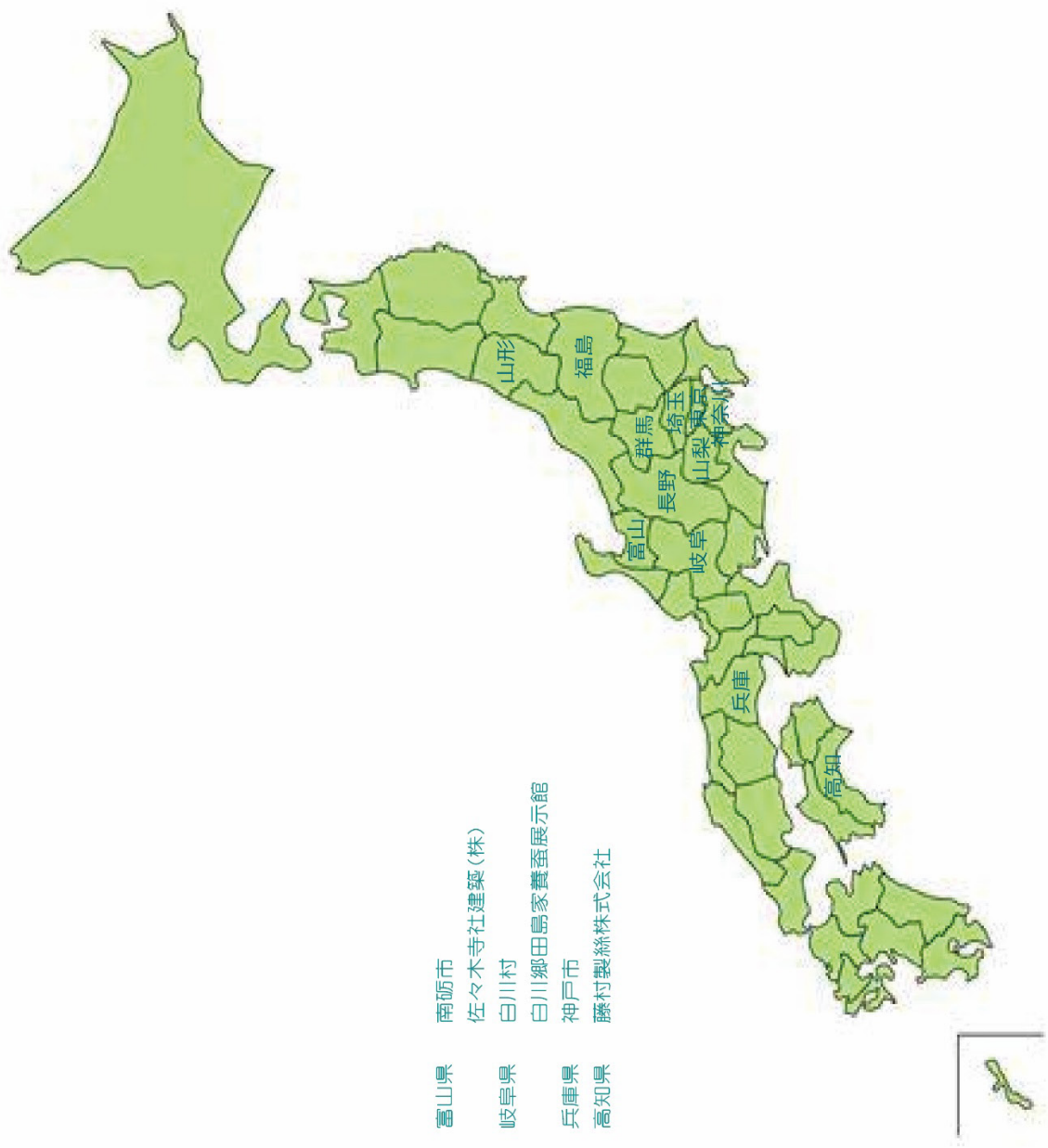
賛助会員 12,000円

2. 連絡先 シルクロード・ネットワーク協議会（公益社団法人横浜歴史資産調査会内）

住所：神奈川県横浜市中区相生町361 泰生ビル405

Tel：045-651-1730 E-mail: yh-info@yokohama-heritage.or.jp （担当：米山・河合）

シルクロード・ネットワークの仲間達 since 2015



富山県
南砺市
佐々木寺社建築(株)
白川村
白川郷田島家養蚕展示館
神戶市
藤村製絲株式会社

山形県
鶴岡市
新庄市
福島県
福島市
群馬県
前橋市
昭和村
下仁田町
中之条町
南牧村
NPO街・建築・文化再生集団
前橋工科大学臼井研究室
上州文化ラボ
前橋絹文化研究会
埼玉県
川越市
さいたま絹文化研究会
NPO川越きもの散歩
飯能市
本庄市
小川町
NPO小川町創文化プロジェクト
東京都
八王子市
日野市
神奈川県
横浜市
(公社) 横浜歴史資産調査会
山梨県
甲州市

memo



花嫁行列（2014年1月）：撮影 米山 淳一

シルクロード・ネットワーク・白川郷フォーラム2024

発行年月 2025年3月

編集・発行 公益社団法人横浜歴史資産調査会（ヨコハマヘリテイジ）
tel : 045-651-1730 mail : yh-info@yokohama-heritage.or.jp
NPO 法人 街・建築・文化再生集団（略称 RAC）
tel : 027-210-2066 mail : act@npo-rac.org

名古屋朝日軒さんにご協賛頂きました